

上海は起ち上る

東英男著

312.2221
A989s

國民政治經濟研究所

2



0005362-000

312.2221-A989s

上海は起ち上る

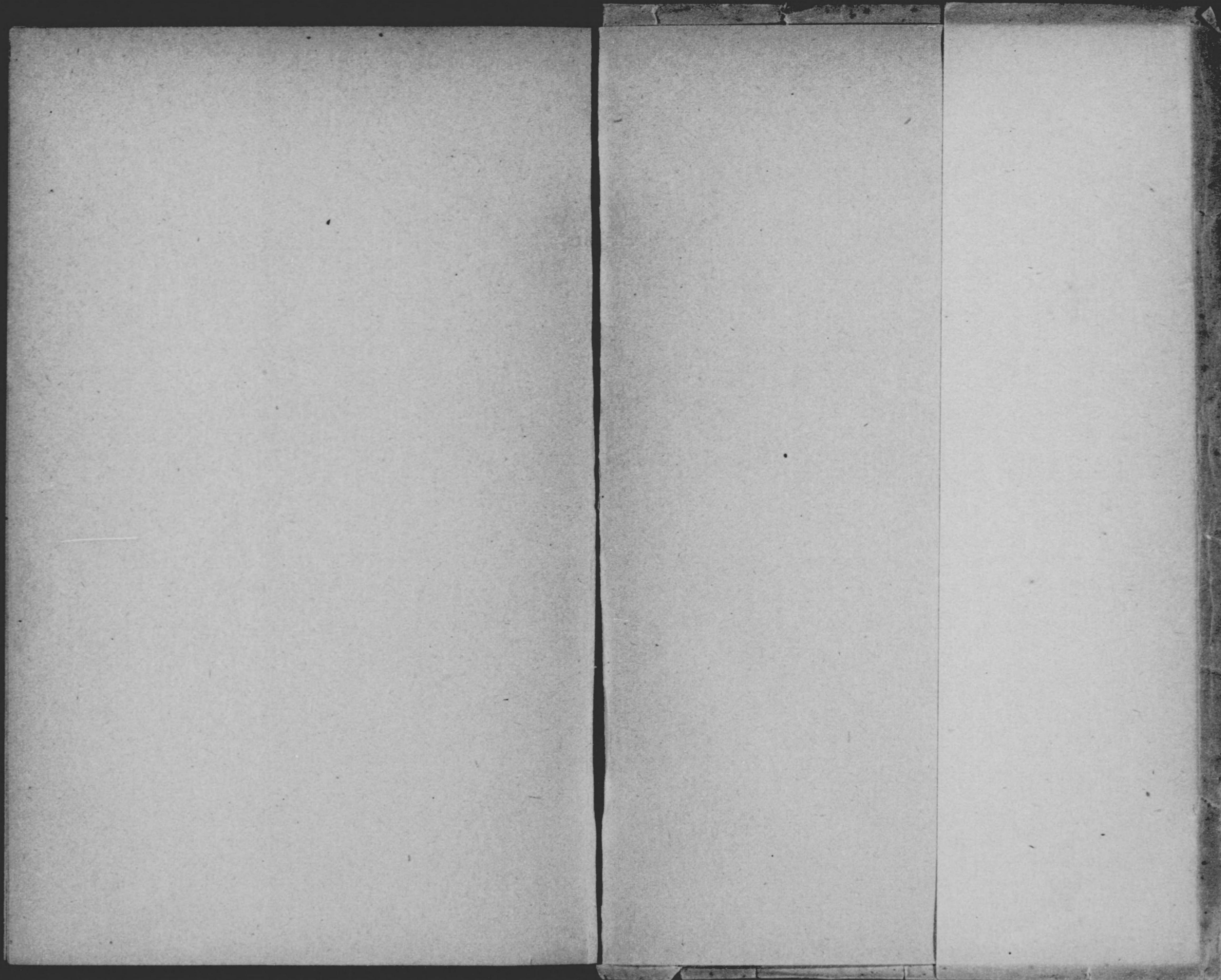
東英男・著

國民政治經濟研究所出版部

1943

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

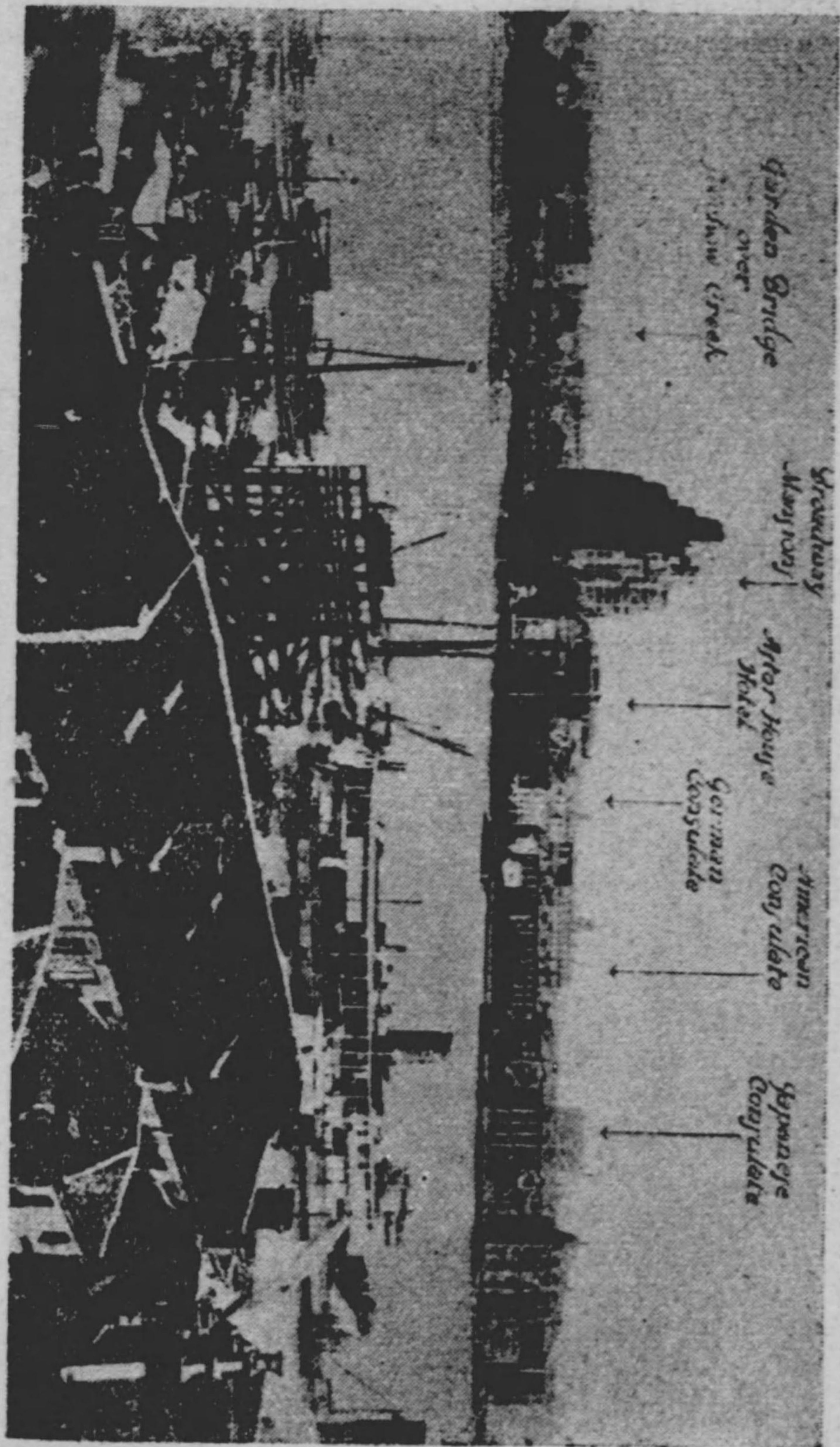


東英男著

國民政治經濟研究所

上海は起ち上る

浦東より上海市街をみる



~~312.2221~~

~~A989~~



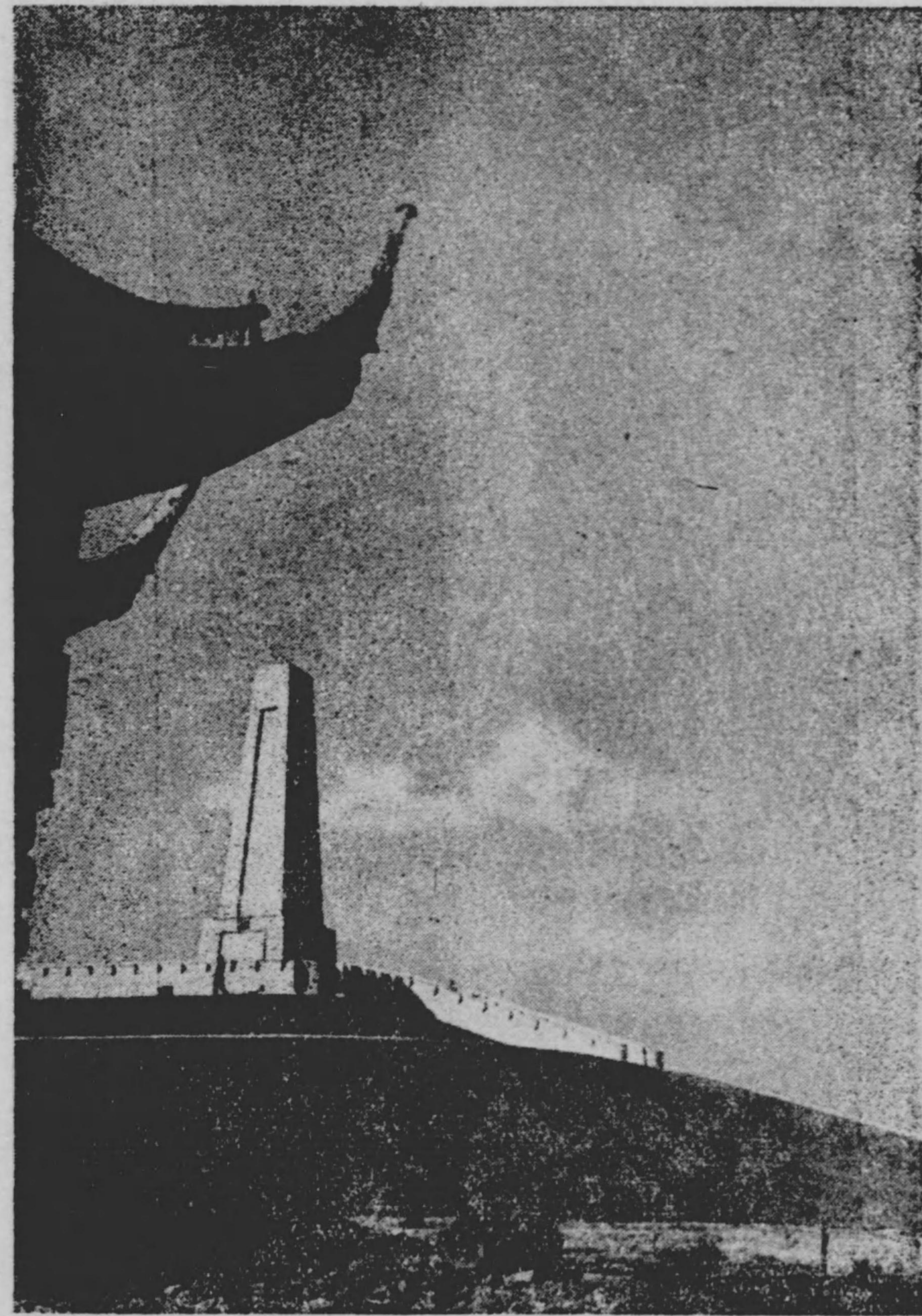
~~312.2221~~
~~H989~~

312.2221
A989

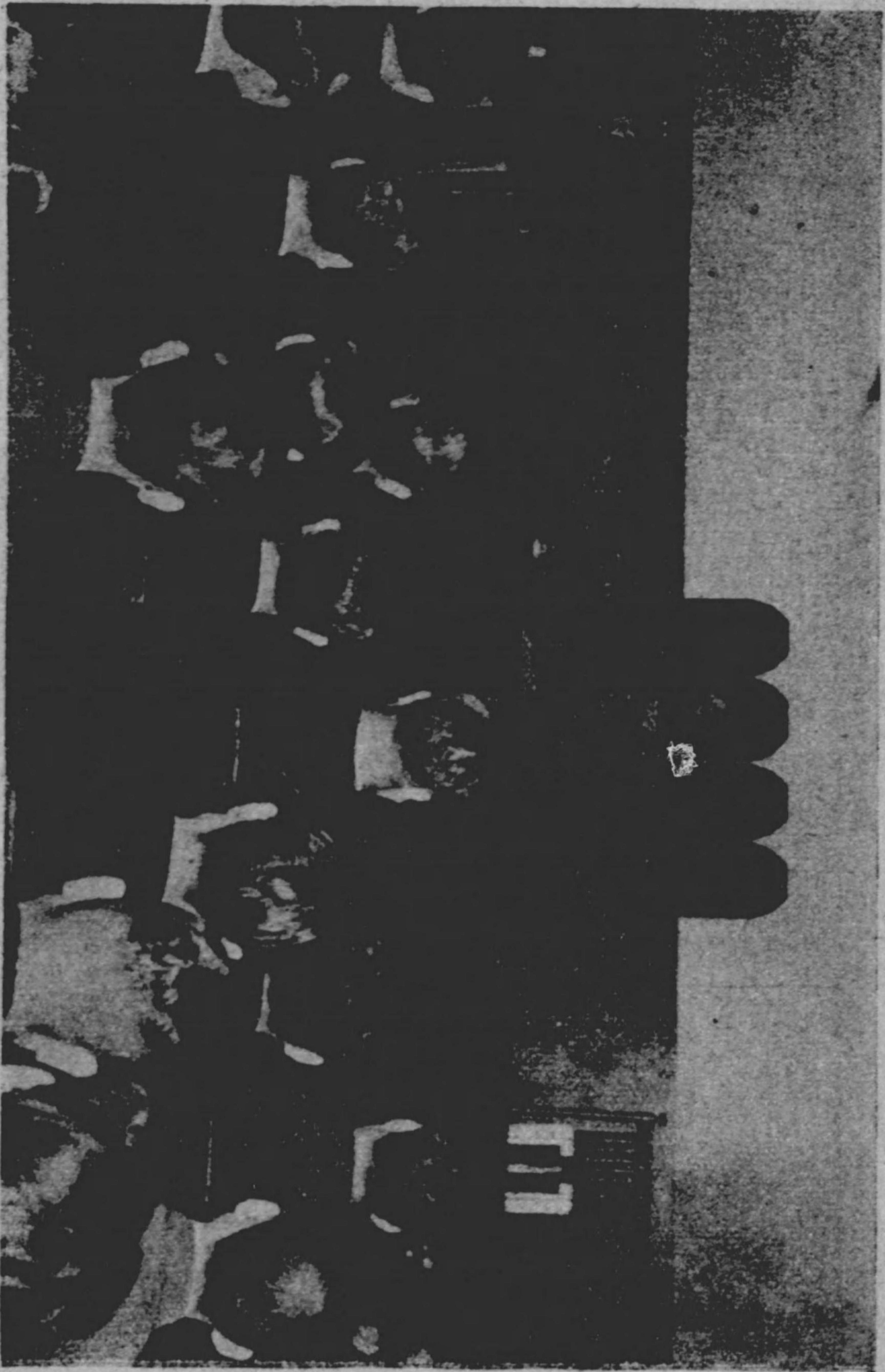
31214



上海における東條首相と田尻公使(上海陸軍報道部寫眞班撮影)



英靈ねむる大場鎮表忠碑



上海大使館事務所における東條首相の訓示(上海陸軍報道部寫眞班撮影)

目次

1 上海の成立ち

一

近代支那の心臓部

三

上海の地理的歴史的環境

七

米英の策謀と敵性上海の出現

一五

抗日援蔣都市と化する 二

2 敵性上海の覆滅 三

租界進駐と米英行政の崩壊 三

敵産處理の進行 四

舊法幣の没落、通貨統一策の進展 五

敵性文化の掃蕩 六

3 起ち上る上海 七

逞しき再建への進發 七

大東亞省の生誕、現地機構の飛躍 八

新しき現地機關の建設的構想 八

國府參戰ごわが對支新政策 九

封鎖を解かれた上海 一〇

街に見る新上海の相貌 一〇

1 上海の成立ち

近代支那の心臓部

今や大東亞戰爭の進展と共に、上海は内外の異常な注目を浴びるやうになつた。新しき大東亞建設の兵站基地として、上海は最大最重要なる據點の一つとならねばならないからである。來るべき大東亞共榮圈が、政治的にも經濟的にも、日支兩國を中核として形成さるべきであることは、既に論ずるまでもない。従つて今日まであらゆる意味で支那の心臓部をなして來た上海が、新しき東亞に於て大きな役割を受持たねばならぬことは當然なのである。建設基地上海が廣く論議の對象となつてゐるのも故あることである。

上海が今日まで如何に支那に於て重要な存在をなして來たか、われわれは一應具體的な根據に立つて見る必要があらう。

第一に、上海は支那第一の大都會である。その人口について正確な數字を得ることは困難であるが、戦前に於て、通常約三百五十萬といはれ、現在に於ては五百萬に近いとさへいはれて

ある。これはまさに近代的工業國家に於ける大都市の人口である。南京の六十五萬人（事變前約百萬）はじめ、支都の各都市は到底上海の比較ではない。

この中外國人は、事變直前一九三六年の調査によれば七萬餘、これを國籍別に見れば、五ヶ國に近い各國人の寄合世帯で、最も多いのは勿論日本人であるが、約四萬五千人（今日では殆ど倍加してゐる）以下ロシア人（主として白系露人）の一萬五千人、英國人の九千六百人、米國人の三千八百人（勿論、大東亞戦後米英人は多く引揚げた）といった順序である。尤も最近の注目すべき事實として、所謂無國籍ユダヤ人の續々たる渡來があり、これが既に五萬人近いといはれてゐるが、全體として見れば外國人の數は日本人をも含めて極めて微々たるものであり、上海人口の大部分はやはり支那人によつて占められてゐるのである。

この、人口的集中の一面のみを見ても、上海の支那に於ける特殊な重大性を知ることが出来る。實に上海は支那唯一の近代的大都市であり、上海を度外視して近代國家としての支那を語ることは出来ないのである。

第二に、上海は支那第一の貿易港である。試みにこれを戦前の出入船舶噸數について見るな

らば、一九三三年及び三四年に於て何れも約二千萬噸に達し、ロンドンの二千八百萬噸、紐育の二千六百萬噸、神戸の二千二百萬噸に次ぎ、世界第四位の大貿易港をなし、香港其他支那各開港場はその比でない。これを輸出入額について見るならば、一九三三年に於て九億千七百四十五萬元、全支輸出入總額十六億五千三百一十萬元中の五十六パーセントを占めてゐる。すなはち全支輸出入の過半は上海港を通じて行はれて來たわけであり、以て物資流通の面に於ける上海の重要性を知ることが出来る。

第二に、金融經濟に於て上海は全支の中樞をなして來たのである。民國二十六年度全國銀行年鑑によれば、全支銀行の本店數は百六十三行で、その上海所在のものは五十五行に達してゐる、また右百六十三行の資本總額は四億三千四百三十餘萬元、その中上海五十五行の資本總額は二億七千二百九十餘萬元である。これを比率の上から見るに、數に於て全支の三三・三四パーセント、資本額に於て六二・八五パーセントを占め、量的にも質的にも絶對的重要性を示してゐる。また銀行のみならず、錢莊と呼ばれる支那式金融機關の數百があつて、個々の資本に於てさほど大きくはないといふものゝ全體としては輕視出来ない資本力を以て活動して來て

六
ゐる。すなはち全支金融資本の半ばは上海を根據として動いてゐたのであつて、勿論そこには多大の程度に於て外國資本が加つてゐたといふものゝ、金融經濟に於ける上海の特異な重要性は見逃すことが出来ないのである。

第四に、上海は工業生産に於て巨大な存在であつた。いふまでもなく支那の工業生産はなほ甚しく未發達であり未熟である。支那經濟に於て工業的生産の占める位置はさほど高いものだつたとはいへない。然し乍ら支那經濟の發展過程がその近代への方向、工業的發展への方向にあつたことは疑もないのであつて、この歴史的過程に於て、上海の工業が受持つて來た役割は決して小さくない。上海が支那に於て工業的に如何に重要な位置にあつたかは明らかに數字が示してゐる。中國經濟統計研究所の一九三三年三四年度の調査によれば、中國工場法の適用を受ける工場は全國の五〇パーセントを占め、全支近代工場二、四三五の中一、二〇〇工場が上海に集中してゐた、これを綿糸紡績、製粉、煙草、製糸等各重要産業部門別に見ても、これらに屬する工場の大多數は上海に集中してゐる。すなほ綿糸紡績工場全國一三六工場の中六四工場、煙草工場六〇工場の中四六工場が上海にある。資本總額から見れば全支の四〇パーセント

労働者數では四三パーセント、生産物價に於ては五〇パーセントを占めてゐるのである。勿論これ亦資本的には外國勢力に負ふ所が大きく、紡績、織布工業に於て日本系が首位を占めてゐるのをはじめ、多くの大工業が外國資本によつて開發され運轉されて來たことは事實であるが、このことによつて些かも上海の支那工業に於ける重要性が損はれるものではあるまい。

これら、數字に示された事實を概観することによつて、われわれは容易に、支那に於ける上海の重要性を知ることが出来るであらう。上海が支那の心臓だといふ表現に偽りはないのである。従つて來るべき大東亞共榮圈が、日支の協力を中核としてのみ實現さるべきものであるならば、上海こそはまさしく大東亞建設戦に於ける最大の基地とならねばならないのである。昨今上海特に上海經濟が人々の注目を集めてゐることは當然である。

上海の地理的歴史的環境

何故に上海はかくも特異な、かくも巨大な存在となつたか、北京、南京、武漢等、支那の舊

い都市をはるかに凌いで、全支の経済的心臓部をなすまでに伸長發展したか。これについて一應の検討を試みることは、大上海の概念を把握するために、是非とも必要なことと思はれる。そこで、われわれはこゝに上海の地理的、歴史的環境について大づかみな知識を得て置くこととする。

先づ、上海の恵まれた位置である。揚子江を溯ること約四十一哩、黄浦江との合流點から左折して更にこれを溯ること約十三哩、黄浦の北岸、北緯三十一度四、東經一二一度五の地點を中心として、長さ十哩餘に亘る大都市がすなはち上海である。上海の繁榮の原因の一半は實にこの位置にある。

支那の古文献によると「上海は江蘇省の東南にあり、東は大海に臨み、西は蘇松に接す。南は黄浦江を瞰し、北は長江を枕にす。山稜湖泊なく、唯一望の平野、沃土數百支里、黄浦、吳淞（蘇州河）の兩江が縦横に交錯し、古來澤國の稱がある。附近一帶は揚子江が押流した泥土の沖積して成つた江南三角洲の一部であり、従つて土壤肥沃、物産豐饒、交通の便利、戶口の殷盛、全國に冠たるものがある」といつてゐる。これによつても明らか通り、上海は大揚子

江の三角洲を背景とし、この上に成長した港市である。上海の地理的環境として揚子江の意義を逸することは出来ない。揚子江こそは大上海を成立せしめた偉大な生みの親である。

揚子江の大きさは誰でも知つてゐる。その源流を探ねれば、はるか西藏の奥チヤンタ高原にあり、この水源から吳淞東沙に至る揚子江の全長は三千百二哩に達し、世界第四の長流である。その河幅は三峡の險（重慶、宜昌間）で一千里、漢口で四千三百呎、九江から吳淞東沙までは五千乃至八千呎。水面の勾配は宜昌、漢口間で一哩につき三・六吋、漢口九江間で同二・三吋九江吳淞間で二・七吋。水流の速さは最高八節、普通冬期は三節、夏季は六節とされてゐる。この長大豊富な水流が、奥地から海に向つて運んで來る泥土は年々六億噸を越える、これらの泥土はすべての河がさうであるやうに、河口に於て順次に堆積し、三角洲を形成する。流れが大きければ三角洲も亦大きい、揚子江の生んだ所謂江南三角洲はその面積およそ五萬平方哩、杭州から鎮江への一直線以東の地はすべてその中に入るといつてよい。この大三角洲こそ上海の背景である。

従つて上海全市の地勢は極めて平坦で、平均十二呎半に過ぎない。土質はすべて沖積土、殆

ど岩石を認めることがない。この平坦を極めた沖積土の大平原は、人口實に三千萬人、當然にも地味肥沃で最も耕作に適し、自然の穀倉をなしてゐる。そして、その捌け口を揚子江に見出す、物資は良港を求めて上海に集る、上海繁榮の基礎がそこに置かれるのである。

揚子江の恩恵は三角洲の豊沃ばかりではない、むしろ、上海にとつて重要なのは長江の齶した水運の便である。揚子江本流は勿論として、縦横網の目にも似た支流を併せて、その舟運の延長は世界第一とさへいはれる。いま本支流を合せて船を通し得る哩數を見るに、汽船は一千五百哩、小蒸汽船は三千五百哩、民船は八千五百哩、いたる所船の通じない所はないといつた有様である。本流を漢口に通ずる水路は、減水期に於てすら四千噸級の汽船を通し、増水期ならば一萬噸内外まで可能である。南船北馬といはれるこの水運の集約點たる上海が、中部支那商業上の門戸として、物資の一大集散地となつたのは自然な結果である。

次いで、上海發展のいま一つの要因として、その歴史的環境を見よう。

上海の誕生は今を去る八百餘年前、宋の時代にある。それは前記の如き地理的條件に恵まれて、大陸の門戸たる使命を以て生れたのである。そして元代には縣城となり、明末には外寇を

防ぐための要鎮として城壁が築かれた。抑も上海が港都として急激な發展を見たのは、元の時代、海運の發達による、當時上海から北京に運ばれる米は毎年百萬石乃至三百萬石、これに要する船舶は三千隻に達したといふ。そして當時の人口は文献によれば戸六百餘里といひ、一里は二十五戸故約一萬五千戸、一戸五人平均として七萬五千人となるわけである。

しかし、上海が國際的重要性を以て今日の大都市の基を築いたのは、いふまでもなく一八四二年八月、南京條約締結の後である。

一六八九年、清朝の康熙二十八年、支那ははじめて税關制度を設置した。支那はその頃から漸く歐洲と通商を開き、寧波、福州、上海、廣東の四税關を設け、外國から輸入する貨物に對して課税することゝした。然るに當初の税關吏はすべて支那人であり、且つ一種の請負制度をとつてゐたため、課税は亂脈を極め、税關は外商怨嗟の的となつた。その頃から對支貿易に於て最も重要な位置にあつた英國はこれに對して幾度か抗議を提出し交渉を重ねたのであつたが、事態容易に解決せず、結局遂に所謂阿片戰爭を惹起して英清兵火を交へるにいたつた。この戰爭の結果として出現したのが南京條約であり、香港は英國に割讓され、前四港の外廈門を

開港場と定め、且つ關稅收入を償金の擔保とした結果稅關事務は英國の監督を受けることとなつた。そして英國人はこれらの港に居住し得ることとなり、更に引續いて交渉の結果、上海に於ては一八四五年十一月「英國人が支那人地主より土地を取得し得る地域」を別に設けるといふ取極めに成功した。すなはち「土地章程」であり、この地域が現在の共同租界の起りである。

土地章程は其後數次に亘つて改訂を加へられ、一八九八年の改訂によつて出來たものが現行の土地章程であるが、この間、租界發展の重大な契機をなしたものは、一八五〇年から一八六四年にかけて起つた長髮賊の亂（太平の亂）である。租界はもと外人の専用地區として支那人の居住を禁止してゐたのであるが、この亂に際して支那人の租界内への避難を認められたことから、意外にも租界は非常な繁榮を見ることとなつたのである。といふのは、支那人が租界の治安を信頼した結果、年々こゝに移住する者が増加し、財産も亦租界内に移すことに努め、支那に内亂の起る毎にこの氣運は一層拍車され、所謂民族資本の租界への逃避と蓄積が行はれたのである。支那人は上海租界をいはゞ貯蓄銀行に見立て、上海以外で貯めこんだ財産をもこゝへ運んで蓄積し、またこれを運用利殖することに努めたのである。

かくて租界といふ特殊地域を根據として、外國資本も太つたし、支那民族資本も太つた。そしてまた租界人口の増大につれて、租界地域自體も順次に擴大された。長髮賊の亂に當つて英陸軍少佐ゴルドンの指揮する租界防衛軍は各地に轉戰連勝したが、この時軍用道路として租界に接續する郊外に道路を敷きいはゆる越界道路の端を開いた。これが導線となつて租界の範圍は次第に伸び、その上蘇州北方地區に増加した米人居住者によつて實質上の米國租界が出現し、やがてこれを英租界に合併しようとする氣運を生じ、遂に虹口、楊樹浦方面を加へてこゝに共同租界の出現となつたのである。

共同租界が今日の地域を確定したのは一八九九年である。時の兩江總督劉坤一は工部局の要求を容れて地域の擴張及び同年四月發布の新土地章程を認め、租界當局との間に圖面を交換し、こゝに境界石を置いて始めて租界地域は確定されたのである。

所で、上海にはこの共同租界の外に佛蘭西租界がある。共同租界程の大きさはないが、やはり上海の歴史的環境として重要な役割を果して來てゐる。

一八四二年英支間に南京條約が成立した時、佛蘭西も亦これに参加を企てたのであつたが失

敗に歸したため、一八四三年新たに佛支條約を結び、英國と同様上海、廣州、厦門、福州、寧波の五港に於ける通商貿易權を獲得した、次いで一八四八年上海城北門、徐家匯に教會堂建設の權利を獲得し、更に翌年佛國專管租界の設定を許されるにいたつたのである。長髮賊の亂に於ては英佛兩租界の共同統治論も起つたが、佛蘭西側はこれを肯んぜず、一八六八年には第一次佛租界市政章程が發布され、爾後數次の改訂を経て今日にいたつたのであるが、この間佛租界當局はあくまで独自の政權維持に努め、その收入不足は賭博、阿片、賣笑等の稅收によつて補ひながら、租界發展に力を注いで來たのである。

これら租界制度の確立は、上海の經濟的發展のために最も強い地盤をなすものであつた。外國人はこれによつて生命財産の安全を確保することが出來、従つて諸外國の貿易業者はじめ金融業者、商工業者は上海を足場として對支進出を實行することゝなつた。そして支那人も亦租界に足場をもつことの安全と有利を知つてこゝに集中し、やがて驚くべき繁榮を上海に齎したのである。

以上が大上海の背景をなす地理的歴史的環境の概観である。われわれはこれによつて今日ま

での上海の特異な性格の概要を把むことが出来るであらう。

米英の策謀と敵性上海の出現

さて、上海の繁榮の一半が、外國主として米英の勢力に負ふ所であつたことは、遺憾ながら否むことの出來ない事實である。すなはち上海の歴史的環境として、租界の存在が重要な役割を受持つて來たことは前述の如くであり、その故に上海の在來の性格は、多分に米英依存的なものだつたのである。

しかしこの米英的上海が、いつまでもそのまゝの形で繁榮を持續するといふことは、所詮不可能な希望であるといはねばならない。何となれば、かつて百年以前に租界といふ形式で英國が支那への進出に成功した時の東亞は、たしかにさうした方法に價するだけの後進者でしかなかつたが、今日では全く事情が異つてゐる。日本は既に堂々たる文明國であり、支那も亦既に昔日の半植民地的封建國ではない、東亞は既に「租界」を必要としないのである。充分に自ら

立つべき實力を具へるにいたつた東亞は、つひに米英への依存から離れるべき時機に到達したのである。東亞は解放されなくてはならない。上海は百年の米英依存から脱却しなくてはならない。上海の舊來的性格、米英的性格は常に清算さるべきものであつた。

然るに、東亞の解放、上海の更生は、われわれにとつて極めて不幸な形で着手されねばならなかつた。その意味に於て、米英側の野望的戦略は成功したといへよう。すなはち東亞が一體として自らの解放戦に立つことを阻止すべく、日支兩國を分裂させ對立させようといふ彼等の策略は圖に當つたのである。

日本の上海進出は米英佛に比して甚だ遅ればせであつた。その地理的近接にも拘らず、日本は凡そ五十年を遅れて上海に進出した。従つてすべての點に於て常に米英の優位を許さねばならなかつた。しかし、考へて見ればこれは無理もないことで、英國がその東亞への進出を企てた時代は、日本がなほ支那と共に桃源の夢を食つてゐた封建鎖國の時代だつたのである。いひかへれば、日本は歐米と共に支那に進出するよりも、支那と共に歐米に進出されねばならぬ位置にあつたのである。

これを史實についていふならば、支那が英國の進出に對して阿片戦争を戦つた時、殆ど時を同じくして日本は米國艦隊の威嚇的來訪を受け、その開國要求を突つけられてゐたのである。支那が蒙つた阿片戦争の屈辱は、日本の先覺的志士をして攘夷討幕の急務を主張せしめた警鐘である。幸にして日本は支那の優柔不斷を學ぶことなく、一舉にして討幕革命を敢行し、一躍にして歐米列強と實力を競ふまでになつたが、上海租界設置の當時はなほ支那と選ぶ所のない封建國に過ぎなかつたのである。従つて英國が既に上海に強固な地盤を築上げてゐた明治十年の頃、上海に於ける日本人の数が僅々百人を出なかつたことも怪しむに足りない。

日本人が本格的に上海に進出しはじめたのは、日本がその實力に於て列強に伍するにいたつた日露戦役の後である。そして歐洲大戰當時には早くも一萬一千七百人を數へ、更に大戰後日本紡織工業の上海進出を機會に、上海を根據地として中支に進出する者が相次ぎ、昭和十年四月現在の統計では、朝鮮人、臺灣人を合せて二萬九千三人となつた。次いで昭和十二年八月支那事變の擴大と共に、大多數の居留民は内地に引揚げたが、その後の推移につれて復歸する者が日増に多く、十四年一月一日現在に於ける調査によれば、三萬七千八百七十一を數へ、以後

次第に増加して十四年六月一日現在では四萬四千八百五十一人に及んだ。

これによつて見ても、日本人の上海進出の歴史が米英のそれに比して甚だ短いことを了會出來る。僅かに四五十年である、日本及び支那はその物質文明に於ける後進性の故に長い間上海の米英的性格をいかんともなし得なかつたのである。しかも、米英の勢力は單にその歴史の長さのみ依るのではない。彼等はその對支進出の野望に對する障害として、近年に於ける日本の進出を危惧し、これを抑壓しようとしてあらゆる政治的經濟的謀略を試みた。すなはち支那の政治勢力を支援し煽動して、その米英依存的、排日的傾向を強化すべく努力したのである。こゝに大東亞戦前の上海の反日的性格の根柢を見出すことが出来る。米英は遅ればせに入つて來た日本の急激な進出をおそれ、更にまた日本の指導による東亞全體の復興と上海の離脱をおそれ、これを封壓してあくまでその獨占的進出を維持しようとする。益々上海の米英依存的性格を強化したのである。この米英的謀略が主たる因となつて支那の排日は激化し、上海事變となり支那事變となつた。東亞の復興にとつてこの上の痛恨はない。

昭和六年、滿洲事變に呼應して南支の排日運動は益々激烈となり、對日外交の紛糾と共に政

權を投出した廣東政府は、その實力的背景である十九路軍を率ゐて上海に引揚げ、對日抗爭を續けることゝなつた。排日の風潮は全支に漲り、特に長江沿岸を中心とする排日運動は激烈を極めた。邦人に對する暴行は相次いで各所に演ぜられ、七年一月八日に櫻田門外不祥事件を報じた國民黨機關紙の不敬文字に憤激した上海青年同志會員の三友實業社襲撃放火事件となり、その歸途支那巡捕との衝突に於ては死傷者を出すにいたつた。

村井總領事の正式抗議文を受取つた上海市長吳鐵城は日本側の要求を容れ、反日團體の即時解散を約したが、上海抗日聯合會はこれを認めず、陳銘樞蔡挺楷の十九路軍は北停車場から吳淞に亘つて攻撃態勢を整へ、一方吳鐵城は公安局巡捕二千名と共に逃亡して、共同租界の不安は深化し、各國軍隊は所定の警備部署についた。

わが特別陸戰隊も亦、その分擔區域たる北四川路、狄思威路一帶の配備に赴かんとして市街行進中、支那正規軍及便衣隊のために猛射を受け、自衛上止むなくこれに應じ、つひに上海事變の火蓋が切られた。時に一月二十八日の夜十一時。

十九路軍は交戦準備が整つてゐたが、我が軍はたゞ居留民保護の目的で出動したにすぎず、

兵數僅かに二千數百、一時苦境に陥つたが、連日に亘る不眠不休の活動によつて形勢は展開し、不利と見た敵は英米領事に停戦の斡旋方を頼み込み、一應停戦の協定が成立したのであつた。然るに便衣隊の活動は依然やまず、三十日朝我が第一線及び後方に向つて猛砲撃を加へ來つた。我が軍は居留民の保護と經濟的地盤確保のため、決然これに反撃し、停戦命令の出た三月三日にいたる一ヶ月にわたつて戦闘が交されたのであつた。

支那軍は葵挺楷指揮下の十九路軍及五路軍で、日本軍は植田中將の第九師團の外海軍陸戦隊の増援があり、その第一遣外艦隊、水雷驅逐艦隊、航母能登呂も參加した。廟行鎮の戦闘では肉弾三勇士が出、忠烈皇兵のために氣を吐いた。これを上海事變といふ。

疑もなくこの事變は、日支離間を策する米英の謀略に乗せられた支那が、その無自覺故に故意に招いた戦火であつた。しかもこの無益な戦火に性懲りもなく、國民政府はその排日政策を改めず、ついに全米英勢力の走狗となつて日本に對抗し、上海及其近傍の敗戦の跡に再び武備を強化し、虎視眈々對日挑戰の機會を狙つたのであつた。そして、やがて支那事變といふ拔差しならぬ泥濘に自ら陥ち込むことゝなつたのである。

昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件に次いで、上海附近では八月十三日夕刻から日支兩軍の交戦が開始された。これに先つて上海の支那保安隊及び上海を取巻く支那軍隊は、演習と稱して各所に陣地を構築し、停戦協定を無視して對日戦備を進め、租界外在住の支那民衆は續々租界内に避難を開始し、全市は物情騒然たるものがあつた。偶々八月九日陸戦隊第一中隊長大山中尉・齋藤一等水兵は視察報告のため共同租界越界路モニユメント路を自動車で通行中、多數の支那保安隊に包圍され、機銃、小銃の射撃を受けて斃れた。取調べの結果は全く支那側の停戦協定無視と正服日本軍人に對する挑戦行爲と判明した。しかしわが方は上海の特殊事情に照し、事態を平和の裡に解決するため、取敢へず最小限の要求として、保安隊の即時引揚げと停戦區域内の軍備撤退を求めた。それにも拘らず支那側は野砲、迫撃砲、機銃を有する約一萬の保安隊獨立部隊を上海に置き、一方南京、鎮江中央軍の第八八師、蘇州の第八七師、松江、嘉興に第五五、五六師を集め、無錫、常州の鐵路に沿うて第三六師を駐め、合計十萬の兵を以て上海を包圍し、更に空軍は南京、杭州に待機した。八月十二日朝來支那保安隊は邦人密集地に近い北停車場附近から、河南路、赫司克路一帶の支那街に進出し、西部では蘇州河に沿ひ内外

綿對岸一帯にも進出した。更に吳淞方面には正規軍が移駐、砲臺にも配備されたとの報道があった。危機は切迫した、陸戦隊は非常警備につき、北四川路北方面の邦人は北部小學校に避難するにいたつた。

八月十三日、支那側の發砲から兩軍はつひに衝突した。虹口一帯、わが陸戦隊警備區域には囂れる敵の大軍が押寄せ、激烈な市街戦が各所に展開した。爾後旬日に亘つて引續いた激戦に於て、寡兵よくこれを支へ、居留民保護の任を全うしたわが陸戦隊の死闘こそ眞に讀へらるべきものであつた。

上海居留民の危急迫るや、廟議は遂に不擴大方針を排して陸軍の上海派遣を決定した。八月二十三日、松井大將の指揮する上海派遣軍は居留民待望の裡に吳淞鐵道棧橋及川沙口鎮附近に果敢なる敵前上陸を敢行し、戦史にその成功を謳はれるにいたつたが、吳淞上陸の倉永、鷹森の諸隊は吳淞クリーク南岸地區に於て、川沙口鎮上陸の和知、永津、安達、淺間の諸部隊はまた羅店鎮進出後に於て、二十數倍の敵の重圍を受け、こゝに激烈悲愴なる戦闘が展開され、倉永少將はじめ多くの犠牲が拂はれた。

八月三十一日軍は局面打開のため鷹森部隊をして吳淞鎮北側地區に上陸せしめ、戦果を擴大し吳淞砲臺、寶山城を攻略し、泗頭クリークの線に進出した。この頃石井、田上、天谷の諸部隊は新たに吳淞附近に上陸して直ちに戦線に参加した外、飯田支隊の虬江碼頭上陸があり、八日に亘る激戦の後、當面の軍工路陣地を突破して市政府に進出し、公大飛行場の使用を可能にした。

九月七日以降、天谷、田上、石井各部隊は一齊に泗頭クリークの線を越えて攻撃を開始し、クリークと部落とを綴る敵陣地を撃破し、十二日、ほゞ時を同じくして月浦鎮、揚行鎮、廟村の敵抵抗陣地を突破、更に困難なクリーク戦を續けて叔里橋、金家灣、玉丸房等の堅陣を破り、三十一日田上部隊は劉家行を、石井部隊は顧家宅を奪取し、他方、四旬に亘つて敵の重圍に苦戦した和知、永津部隊は、淺間、安達兩部隊の叔里橋突破と共に羅店鎮より大攻勢に轉じ、荻涇クリークを越えて猛進、ここに大場鎮攻撃の端をひらいた。

九月中旬以降逐次中支に増加された加納、津田、脇坂、下枝、重藤各部隊を第一戦に加へ、蘆藻濱クリーク北岸に大場鎮總攻撃の態勢は整へられた。そして十月の初め、一部を以て羅店

鎮西方の敵を牽制すると同時に、西は南翔から東は江灣に亘る甕々十二軒、深さ六軒に及ぶ一大陣地帯に對する大攻撃は開始された。

猛攻撃實に三週間、加納部隊長以下多數忠勇の犠牲が拂はれたが、十月二十六日つひに大場鎮を完全占領し、蘇州河の線に向つて敵を急追した。海軍陸戰隊また陸軍の攻撃に呼應して、一部は江灣に突出し、西部正面は開北に攻撃を敢行、開北一帯の掃蕩は成つた。しかし嘉定、南翔及び蘇州河南岸の敵はなほ頑強にしてわが攻撃も意の如くならず、犠牲多くして前途憂慮すべきものがあつたが、勇敢なるわが軍は屈せず、猛攻また猛攻を以てした。時に十一月五日杭州灣に柳川兵團の「日軍百萬杭州灣上陸」が行はれ、その快速部隊が青浦、安亭に進出して敵の背後を脅威し、こゝにわが勇敢なる敵前渡河攻撃と相俟つて蘇州河南岸の敵はつひに崩壊、南方に潰走しはじめた。わが軍はこれを急追して虹橋飛行場、龍華を占領し、完全に南市を封鎖した。十一月九日わが軍は南市にある支那住民のため、軍隊の撤去を勧告したが、敵は應ふるに砲火を以てし、わが川並、鷹森兩部隊は日暉港クリークを越えて南市に突入、壯烈なる市街戦の後十二日全市の掃蕩を終つた。これと同時に海軍陸戰隊と協力した津田部隊は、黄

浦江を渡つて浦東に上陸、難なくその掃蕩を終つた。

かくて上海周邊の敵、撃碎されたのであるが、わが軍は馬を休める暇もなく、柳川兵團は太湖以南の地區から、上海派遣軍各部隊は太湖以北の地區から、大々的攻勢を以て進出し、湖東會戰、南京會戰となり、更に徐州會戰、安慶會戰と進展し、つひに武漢大會戰となり、北支軍の長驅五省を席捲する共に南支に於ては忽ち廣東を攻路し、こゝに世界戦史未曾有の規模を以てする支那事變の長期戰的展開となつたのである。

上海がその米英依存的舊性格を清算して、新しき東亞の上海として更生すべきことは、日本の希望であつたばかりではない。支那民衆にとつても、國民政府にとつてもそれは心からなる希望だつたのである。租界の回收、治外法權の撤廢は國民政府年來の宿題であつた。東亞が全體として復興し、支那がその國家的統一を完成すると同時に、上海の舊性格は清算されねばならなかつたのである。然るに米英側の謀略とこれに乗ぜられた支那當局の無智とは、つひに支那事變の悲劇を醸し出してしまつた。これによつて上海はその米英依存性を脱却する代りに、益々これを強化することゝなつたのである。所謂敵性上海の出現である。

抗日援蔣都市と化す

支那事變の展開は當然の結果として、上海の敵性、米英依存性を強化した。昭和十三年十月二十七日武漢三鎮の攻略成り、蔣政権は重慶として落のびたが、これによつて形の上では事變に於ける日本の勝利が明らかとなり、蔣政権は一個の地方的政權に轉落したといへるわけである。然るに上海の米英的繁榮は少しも衰へを見せなかつたばかりか、却つて益々強化され、米英依存による抗日政策を本旨とする重慶政權はいよいよ頑強にその長期抗日作戦を呼號したのである。

所で上海は事變に對して如何なる立場にあつたか。試みに之を上海の貿易について見よう。

上海貿易がたゞ一港のみによつて全支輸出入の五〇パーセント以上を占めるといふ重要位置にあつたことは前述の通りである。事變前年の一九三六年、上海に於ける輸入總額は五億五千五百萬元で全支の五九パーセント、輸出總額は三億六千二百萬元で全支の五一パーセントを占

めてゐた。この尨大な對外取引が、支那事變によつて少しも減少せず、却つて増大したといふことは、事變下の上海の役割について大きな示唆を與へるものといへる。尤も事變の直後僅かな期間だけは貿易の減退が見られはしたが、これはほんの一時に過ぎなかつた。わが軍の長江封鎖に引續く支那海岸封鎖にも拘らず、上海貿易は益々繁榮したのである。すなはち一九三七年（事變勃發の年）の一月乃至七月の輸出入は月平均一億六百萬圓といふ驚異的數字を表し、日支間の不安が却つて上海貿易を増大させた事實を物語つてゐる。八月、戦火の上海に及ぶと共に一時對外貿易は阻害されたが、一年間を通じての貿易高は僅少な減少を示したに止まつた。翌三八年は引續いて貿易高の減少が見られた。平時全支貿易の五割を占める上海貿易が、この年僅かに三割に過ぎなかつた。しかし翌三九年に及んで、上海貿易は驚異的恢復を遂げた、海關統計によれば貿易額は前年の二倍に達し、そして法幣の對外相場が下落した結果、この年後半の輸出は急速に増加した。續いて一九四〇年に入ると、前年九月からの歐洲大戰にも拘らず、支那事變前の平和時代をさへ凌ぐ數字を示した。尤もこれは法幣計算にみたので、法幣の暴落を計算に入れるためには磅價計算にみる必要があるが、それでも前年前々年

を越えてゐる。

この事實が何を物語るかは説明するまでもなく明らかである。この時代の上海經濟はすなはち敵性經濟であつた。米英勢力は租界といふ形態によつて、一つは對支投資の前進根據地をつくり、一つには支那事變及歐洲戰爭勃發以來、東洋に於ける反樞軸政策實施の基地として來たのである。重慶政權と米英勢力とは、こゝを足場として結合し、對日攻撃の經濟的、政治的作戦を展開したのである。事變下に於ける上海貿易の増大は、米英の對日經濟戰としての援蔣物資の流入を意味する以外の何ものでもない。

同じ根據に於て、事變下の上海工業はまた異常の活況を呈した。勿論上海には日本側の産業施設もあり、事變以來上海周邊地區に日本側の指導の下に經濟建設が行はれて來たのであるが、その比重は工場に於ても生産額に於ても全體の二割程度に過ぎず、百億元に近い米英系諸國の産業と重慶政府指導下の支那民族産業の勢力は、共同租界工部局の米英中心主義の政策及在上海重慶政府各機關の指導と相俟つて、露骨にわが方に對する敵性を示してゐたのである。

元來上海の本質的性格は貿易港であり商業都市である。上海の工業は支那大陸の生産經濟に

深く根を下したのではなく、むしろ米英諸國の對支貿易の加工部分としての性格が極めて濃厚であつた。そしてこの性格は支那事變以來上海が米英の重慶政權援護の基地となつて以來一層濃化されたのである。

上海を通じて或は上海で加工されて重慶へ流れ込んだ米英の物資は、一年を通じ約千五百萬噸と推測された。そこに惹起されたのが上海の援蔣景氣ともいふべき好況である。この援蔣景氣は上海の工業を異常に膨脹させた。泡沫のやうな會社や工場が、個人の住宅や庭園の上に建てられたりした。

この景氣を英米系工業について検討してみると、英系の上海ドックの一九三七年の決算に於ける利益金は六十萬元に過ぎなかつたのが、一九四一年九月には八百萬元の利益を計上してゐる。又所謂英系煙草トラストの名で知られた頤中煙公司一九四一年九月の配當金は約二億六千萬元に及んでゐる。華人系の工業でも、一年間に二十割の配當をしたものは珍しくない。華人紡績業はこの間に三十萬錠を増設してゐる。勿論この景氣は通貨價值の下落にも依ることであるが、これが共同租界に隣接する日本側占領地域と何等の有機的關聯もなしに起つたものであ

ることは注目されねばならない。それは全く米英景気であり、援蔣景気だったのである。

これら、上海共同租界に據る貿易と工業の活況のみをとつてみても、支那事變下に於ける上海の性格の如何なるものであつたかを想察するに難くない。それは抗日都市であり援蔣都市であり、反樞軸勢力の東亞に於ける本據だったのである。

日本は租界の歴然たる敵性にも拘らず、これに一指を染めることも出来なかつた。實に重慶と米英とはこゝを根城として仕たい放題の反日策動を續けたのである。これがために日本が作戦上被つた不利益、政治的に經濟的に被つた損失は計り知ることが出来ない。まさにそれは新東亞建設戦上最大の痛であつたといへよう。

所謂重慶テロは租界を足場として挑梁し、これがために多くの知日派要人が遭難し、多くの日本人が倒されたことは周知の通りである。米英人を首脳とする工部局は治安について責任ある態度を示さなかつたばかりか却つてテロ分子を擁護する氣配さへ見せた。

反樞軸スパイは租界によつて身の安全を保證されながら縦横に暗躍し、日本に不利なあらゆる情報が、重慶はもとより全世界にバラ撒かれた。

しかし何よりも重要なことは、租界及これを中心とする上海の敵性的存在が、反日陣營に與へた精神的援助であつた。日本は武力的に全支の要地を占領しながら、つひに米英勢力に對してどうすることも出来ないではないかといふ見方が、支那の抗日派の對日輕侮を煽り、その士氣を鼓舞したのである。

租界をうて、上海の敵性を排除せよ。現地軍、居留民はいふに及ばず、すべて、事情を知る日本人は、蘇州河南岸を睨んで切齒扼腕した。米英的上海の打倒なしには到底事變の解決はあり得ず、新しき東亞の建設はあり得なかつたのである。しかし、待望の時機は遂に來た。昭和十六年十二月八日である。大東亞戦争の勃發こそは、上海の永い屈辱的な歴史に終止符をうつものでなければならぬ。米英依存の舊夢を清算し、新しき東亞の上海として起ち上るべき時が來たのである。眞に待ち望まれた大上海更生の時である。

2 敵性上海の覆滅

租界進駐と米英行政の崩壊

昭和十六年十二月八日、この日こそ上海にとつて眞に記念さるべき日であつた。對米英宣戦の大詔下つて、我が皇兵は勇躍米英膺懲の聖戦に起ち、陸海空に疾風迅雷の大作戦は展開され、同時に上海に於ても一舉に米英勢力の掃蕩が敢行されたのである。

蟠居百年、事毎にわが大陸政策の抑壓者となり、支那抗日勢力の援護者として東亞擾亂の策源地をなして來た蘇州河以南米英勢力の牙城に對して、堂々皇軍の進駐が行はれた。まさに上海がその悪しき傳統を清算すべき時が來たのである。

尤も當時既に租界間には敵の一兵も駐つてはゐなかつた。彼等は日米會談の行詰りによつて太平洋の風雲急迫するや、順次部署を放棄して上海を逃れ出てゐたのである。すなはち十一月二十七日米國第四マリンが比島に引揚げたのを最後として、米英軍隊は全く上海から姿を消してゐた。わが軍はもとより何等の抵抗にも遭ふことなく、肅然として全共同租界に進駐を終つ

たのである。

但し黄浦江上では一寸した劇的光景が見られた。英砲艦ベトレルの最後である。わが海軍の降伏勧告に對して、米砲艦ウエーキが直ちに白旗を掲げたにも拘らず、ベトレルは降伏を拒絶した。拒絶と同時に轟然わが巨砲は火を吐いた。瞬時にしてベトレルは濁流に呑まれた。これが唯一の砲聲であつた。上海は殆ど無言でわが制壓に服したのである。

租界進駐と同時に、先づ何よりも必要なことは治安の確保であつた。八日午前六時、堀内在上海總領事は佐方大佐、林少佐、松本少佐等を帶同、工部局本廳にリデル參事會議長（英）と會見、フイリツプス工部局總長兼總務局長（英）、マン義勇團司令官（英）、スマイス代理警視總監、波首席警視副總監も列席の上參事會議室に於て會見申入れを行つたが、同日午後四時リデル總長は參事會を召集して堀内總領事の申入内容について詳細報告の上日本軍發露の布告を朗讀し、

「日本側の意向はこれによつて明らかであり日本當局は參事會の誠意ある協力を要望してゐるのであるから我々としても欣然これに應じたい」

と參事會の同意を求めた所、全員異議なく賛同し、日本側の申入を支持し平常通り執務することに決定した。

そして、同夜工部局ではピーズリー報道課長をして大上海放送局のマイクを通じ、工部局の方針、緊急措置等について一般市民に報告せしめ、外支人共平常通り生業を續けるやうに勸告を行つた外、全租界に布告を掲示し、未曾有の非常事態に際し冷靜に善處せんことを要望した。

工部局布告 共同租界市參事會は本日午後特別會議を開催し、滿場一致日本當局の意思を遵守し、共同租界の安寧福利を維持するため平常通り事務を管掌することとなり、市民中或は本日銀行閉鎖事件等ありたるため、恐慌を感じ居れる向あるべきも、本日午後に至りて當事件は各關係方面と検討の上明日夫々の通告を發することとなり、各區の交通線は以下列記の如く取扱ふものとす。

- (一) 滬西區の出入は大西路及除家宅路を經由のこと
- (二) 華人の虹口區への出入は自由たるべし

(三) 外人は一律に乍浦路橋を通過すべし

(四) 南市への出入は老北門經由によること

(五) 共同及佛租界の通行は制限せず、従つてこの間通行禁止等のことなし

本局は各委員會並佛租界當局と緊密なる接渉を保ち、主要物の保存並に分配に對しては同一歩調の下に善處すべく且主要物資の隠匿並に買溜の統制に關しては各項別に細則を設く。かくて工部局は日本側の要請に應じてその事務を續行し、食糧問題、金融問題等に關して緊急臨時の對策を行ひ、開戦直後の上海治安は事無く經過することが出来た。

しかし當然來るべきものは從來米英側によつて首脳部を占められて來た共同租界參事會の改組でなければならぬ。それは開戦一ヶ月の後、十七年一月七日にいたつて實現した。すなはち參事會議長J・H・リデル(英)、參事會員R・J・マクマレン(米)、同F・A・ボロツク(英)、同C・J・シャープ(和蘭)の四名は一月六日わが當局の意向に従つて辭表を提出し、この外N・F・オールマン(米)、R・J・マクドネル(米)、G・A・ヘイリー(英)、奚玉書(英)の四名は戦前既に香港に逃避してゐたのでこれを除籍し、參事會の構成は日本側——岡崎勝男

(大使館參事官)、塙雄太郎(三井物産上海支店長)、矢島安造(日本郵船上海支店長)、中國側——袁履登、張德欽、許建屏、獨逸側——A・グラデー、瑞西側——R・ボン・デア・クローネの八氏となつた。七日敵性色を去つた初の參事會は岡崎勝男氏を議長に袁履登を副議長に選出した。こゝに敵性租界改編の推進力たるべき新しき參事會陣が布かれたわけであるが、新議長岡崎氏は新聞記者との會見で次の如く抱負を述べた。

「上海はいま非常に困難な諸條件の下におかれてゐるが、自分は東亞共榮圏の一環、むしろその重要な一基地としての上海の再出發のために努力していききたい。それには先づ問題を共同租界だけといふ狭い範圍に限定せず、市政府、佛租界ともよく協調し、全體としての上海の再編成を心がけねばならない。……上海をうまくやつて行けるかどうかは今後われわれが東亞共榮圏を本當にやつて行けるかどうかの試金石であるからこの點からいつても上海經營を成功に導くといふことは重要なことである。」

かくして租界行政の指導部は更迭された。そしてこれと共に當然の措置として工部局行政機構、警察機構の廣汎な改革と首脳部の大更迭が行はれ、米英側職員は殆ど退職、日本側がこれ

に代つた。上海更生の踏み出しである。しかし、戦争の勃發は單に租界行政の變化を齎したばかりではない。上海のあらゆる部面に亘つて敵性拂拭の大行軍は開始されたのである。

敵産處理の進行

大東亞戦争の勃發によつて着手された上海の敵性拂拭に於て、最も重要なものは何かといふに、それは所謂敵産處理であらう。米英百年の東亞經綸に根據地の役割を勤めて來た上海である、そこには老大な敵性權益がある、わが軍は租界進駐、米英的行政の切捨と同時に、これら敵産（物資、不動産、企業等）の差押へ、封印を斷行したのである。

これによつて在支敵産は二つの範疇に分れることとなつた、すなはち一つは支那事變によつて生じた敵産であり、一つは大東亞戦争によつて生じた敵産である。前者は舊敵産と呼ばれ後者は新敵産と呼ばれてゐる。

軍は開戦と同時に差押へた新敵産に對し現地の作戰其他の必要を考慮しつつ順次具體的處理

方針を決定、これを実施したが、いふまでもなくこの敵産處理は大東亞戦争の勝利的完遂と、新しき東亞國の建設のために、敵性財産を最も有効に運用しようとするものである。上海の經濟的更生は先づこの敵産處理にはじまつたといつてよからう。

就中重要なのは敵性企業の處理である。従來、米英と重慶との中間にあつて、兩者の大工廠をなして來た上海の工業、そしてまた運輸、金融等の諸企業を、その根本的性格から樹て直して、わが大東亞建設戰の推進力たらしめるために、如何なる方策がとられたか。

昭和十七年三月二十三日、上海方面陸海軍當局は、軍布告並に陸海軍報導部長談を以て敵性企業軍管理に關する大方針を内外に公表したが、これによつて敵性企業處理に關する軍當局の態度を知ることが出来る。

報道部長談は次の如く聲明してゐる。

〔前略〕 今日我國は東亞諸民族を米英の政治的經濟的桎梏より解放する大使命を荷つて大東亞戦争の完遂に邁進しつつあるが、これがためには東亞共榮圏にある各種經濟施設を總動員し、これを最も有効に活用し、以て東亞諸民族の共榮と國防の充實を圖らねばならぬのであ

る。然るに上海方面に於ける重要經濟施設は概ね英米系商社の把握する所であつて、これらの企業の運用を従前通り英米系商社に一任することは、大東亞戰爭遂行上極めて不適當なことである。茲に於て大日本陸海軍はこれら米英系企業にして大東亞戰爭遂行上その經營權を我方に把握する必要あるものを軍管理とするに至つたのである。尙從來我方の日華提携の眞意を解せず、租界の國際性の蔭にかくれ、蔣政権への援助を事とし、又我方の經濟施策を妨害し居れる敵性中國人企業も亦これを軍に於て管理することとした。しかしながらその企業者にして飄然として過去の非を悟り、日華提携の理想達成に協力せんとする者に於ては、その軍管理を解除するに吝なるものではない。(以下略)

また、同日公表された企業管理に關する布告は次の如くである。

布告文 在中支(武漢地區を除く)敵性企業中敵國人に委するを不適當と認むるものは昭和十六年十二月八日以降軍管理とし左記により上海方面大日本帝國陸海軍最高指揮官之を管理す。

一、軍管理企業は軍事上の要度に應じ陸海軍部隊直接之を管理し又は陸海軍各最高指揮

官の指定する者にその經營を委託し若しくは管理人監督官等を設置して管理の責に任せしむ。

二、軍管理中陸海軍部隊直接管理に屬するもの以外の管理事務は興亞院華中連絡部長官をして之を擔任せしむ。

三、軍管理企業の原所有者又は原管理經營權者が軍管理繼續中當該企業についてなしたる法律行爲は特に陸海軍各最高指揮官の承認するものを除くの外凡てその効力を認めず。

四、五、(省 略)

六、軍事上其他特に必要な場合は既に指定したる軍管理の方法を變更し又は軍管理企業財産の賣却その他必要な處分を命ずることあるべし。

七、軍管理とすべき企業は陸海軍各最高指揮官之を指定す。

八、昭和十六年十二月八日現在に於て敵國籍たる企業又は敵國若しくは人的關係に於て敵國人に支配せられたる企業は既に軍管理の宣告を受けあるものを除き昭和十七年四月二十日

までに興亞院華中連絡部長官に届出づべし。

昭和十七年三月二十三日

上海方面大日本帝國陸海軍各最高指揮官

これによつて敵産處理の大綱が定められたわけであるが、右布告の第二號に基き、興亞院が敵産處理を分擔することとなり、四月二十一日「軍管理企業監督規定」を設け、陸海軍部隊直接管理以外の一般企業の經營に乗り出したものであつた。

かくして敵産處理に進行したのであるが、更に陸海軍當局はその萬全なる運用を期するため、六月十二日附で「新敵産管理委員會」を設置し、上海地區に於ける敵性企業全般に亘る適切な處理を行ふこととなつた。これについての當局談を示せば次の如くである。

當局談 帝國陸海軍は大東亞戰爭勃發以來敵國及敵國人財産につき差押へ物資の處理、金融機關の清算、工場、事業場の軍管理等の措置を講じて來たところ今般中支(武漢地區を除く)における動産、不動産、企業等敵産全般に適切なる處理を行ひ、もつて中支經濟の建設、大東亞共榮圈の確立に寄與せんがために新たに新敵産管理委員會を設置し既にその陣容を整備

し事務を開始せり。

過去の事實に徴して明らかなる如く敵産審査又は處理に關し異議又は請願をなさんとする者は當該財産の所在せる警備區域に従ひ各々所管の陸海軍部隊を通じて、關係證憑書類を添附せる申請書を新敵産管理委員會に提出すべし。

右の方針によつて、敵性企業が現實に如何に處理されて行つたか、順次にこれを見よう。

先づ、黃浦江上の米英商船大小三百余隻は全部わが海軍によつて拿捕された。これは企業といふべきものの中には入らないかも知れないが、重要な運輸施設ではある、船腹が共榮圈建設途上に於ける最大必要の一つとなつてゐる今日、この收穫は大きい。これらの商船は直ちに或は軍用輸送に或は民間輸送に活用されたのである。主なる商船左の如し。

英國側 ジャーデン公司、四隻 モラー汽船五隻 チヤイナ・ペルニツクその他三隻
米國側 ソコテ石油會社その他五隻

次いで銀行關係としては、陸海軍各最高指揮官は一月七日布告を發し英國系六銀行、米國系六銀行、和蘭系二銀行、白耳義系一銀行、合計十五銀行に對し清算を求め、同時にその管理事務

を日本側銀行に委嘱、八日からこれを實施した。これら銀行の業務は清算開始から三日間休業となつたが、一月十二日から清算業務の一部として小口拂出しを行つた。

清算續行中の敵國銀行の保護預り物件は、わが當局の許可を受けて現所有者に返還することとなり、チャータード銀行は一月二十六日、香港上海銀行及びチエーズ銀行は一月二十九日各々保護預り物件の解放を開始した。しかし一月二十日軍當局發表の物資處理方針中に所定のもの及同所定物件の倉庫證券の外、外國紙幣、債券、株式はなほ引出しを許可せず、武器彈藥は勿論政治的物件の如きは沒收となつた。

清算處分を受けた米英側銀行は次の如くである。

ホンコン・エド・シヤンハイ・バンキング・コーポレーション(英)
 サツスーン・バンキング・コーポレーション(英)
 トーマスコツク・エド・サン(英)
 アメリカン・エクスプレス・コンパニー(米)
 アメリカン・オリエンタル・バンキング・コーポレーション(米)

フアインスンズ・バンキング・コーポレーション(米)

チャイナ・フアイナンス・コーポレーション(米)

バンク・バルジュ・ブル・レトランジエ(白)

チャータード銀行(英)

紐育・ナシヨナル・シチー銀行(米)

チエーズ銀行(米)

和蘭銀行(蘭)

蘭印商業銀行(蘭)

アングラーライタース銀行(米)

マーカントイル銀行(英)

これら諸國銀行の清算處分と共に注目されたのは、これらと並んで今日まで敵性を發揮して來た重慶側銀行の處分である。これについてはわが當局の慎重審議が費された結果、中央銀行、中國農民銀行の兩行は最も敵性顯著なりとして先づ清算に附せられた。そして更に引續いて

中央信託局、江蘇銀行、浙江地方銀行、江西裕民銀行等に對して清算處分が行はれた。但し、中央、中國農民と共に敵性銀行と目されてゐた中國銀行、交通銀行に對しては清算處分が行はれなかつた。これはわが當局が中國金融界安定のため、大乘の見地からこれを改組復業せしめることに決したからである。兩行共蔣政權側銀行であつて舊法幣を發行し來り、敵性少しとはいへないのであるが、いづれも清末以來の長い歴史を持ち、一般の信用は甚だ高く、預金、貸付、投資の諸方面に於て支那經濟に密接し、且又兩行共とも民間銀行として發達して來たのであつて、一九三五年以來蔣政權財政部の支配下に置かれたのは決して自發的意志に基くものではない。中央、中國農民兩行の株式は全部蔣政權の「國有」であるが、中國、交通にはなほ多くの民間株主がある。故に敵性を排除してこれを改組し中央儲備銀行の傘下に置き、一般商業銀行、工業銀行として働かせることは民生の安定、經濟の開發に貢獻する所少くないのみならず、新法幣の信用向上は勿論中央儲備銀行の統制力を擴大強化するものである。かうした見地に於て兩行の復業は實現したのであるが、この措置は支那側の豫想外の好評を得、九月一日開業以來極めて順調な發展を示してゐる。

次いで、金融業以外の諸企業について敵産處理の進行を見よう。

上海地區の敵産企業の内、陸海軍部隊の直接管理する以外の管理事務は興亞院華中連絡部長官をして管理せしめるといふ軍當局の方針に基き、興亞院華中連絡部では、軍委任の上海地區敵産工場及び企業を四月一日から國策會社及び日系商社に移管經營せしめることとし、三月二十八日第一回移管經營敵産企業が正式發表された。これによると經營を移託された英米商社は合計六十四社で、内譯は米系二十、英系四十四、この委託を受けた日系商社は國策會社八（敵産企業十二）民間會社三十二社（敵産企業五十二）となつてゐる。その主なるものは電力水道關係は華中水電、通信電話關係は華中電氣通信、ガス關係は大上海ガス、電車、バス關係は華中バス、紡績關係は在華紡績同業會等であり、それぞれ業種別に分割して各關係會社に移管されたわけである。なほ引續いて第二次、第三次の分が發表されたがその數は次の如くである。

第一次分（四月一日）公共事業關係、八會社 一般企業五十六會社

第二次分（五月七日）工場、倉庫、映畫、不動産關係九十九會社

第三次分（九月四日）文化事業關係、三十七件

合計 三百件

この企業管理に併行して、米英工場に對する處理も亦進行した。興亞院華中連絡部では最初、米英系諸工場を暫定的に管理、從來の敵性企業形態を一掃して新事態に善處せしめるため「工場會計監督制」を設け處理せしめた。會計監督は國策會社、日本側の關係商社、組合、團體等から選任された七十五名で、五十二工場に派遣した。そしてこの暫定的處置の後、漸次監督の範圍を擴大すると共に、適當な工場から順次民間に委託經營せしめることとなり、先づ三月三十一日次の十五工場が民間經營に移された。

- | | |
|-----------|----------|
| 慎昌洋行楊樹浦工場 | (東京芝浦電氣) |
| 美團永備公司 | (松下電氣) |
| 上海ドック公司 | (玉造船所) |
| 黃浦機器造船所 | (同) |
| モーター造船所 | (同) |
| オートバレス公司 | (華中豐田) |

- | | |
|-----------|----------|
| 沙利文糖果公司 | (東洋製果) |
| 昌華玻璃公司 | (中華實業) |
| 怡和洋行精酒工場 | (東亞釀造) |
| 上海啤酒公司 | (大日本ビール) |
| 上海機器水廠 | (日本水産) |
| 上海皮廠 | (華中製華) |
| 華懋工業製造廠 | (松華洋行) |
| ピルスモーター公司 | (日産自動車) |

其後今日までに軍管理處分を受けた工場を合せると約百五十社(投資額約四十億元)に及び、いづれも邦人同種業者を受託者又は管理人としてこれが經營又は管理に當ることとなつたのである。

斯の如くにして上海經濟の敵性は一變すると共に、その指導權を日本側に於て把握することとなつたのである。このことは華人企業をして從來の米英依存傾向を清算することを餘儀なく

させた。日華同業公會が戦争勃發後急速に各業種間に結成されたのはこの間の事情を物語るものである。そして華人企業家は日華提携への道に漸く一步を踏み出したのである。

舊法幣の没落、通貨統一策の進展

所で、大東亞戦争の勃發、わが軍の租界進駐は、上海地區の通貨に對して如何なる變化を與へたか。これまた上海の變貌を語る上に逸してならぬ重要事であらう。

十二月八日のこの一撃は、敵性租界の政治、經濟、社會事情を根本的に變革せしめたのであるが、上海の舊法幣についても亦さうであつた。舊法幣がその信認と價值を動搖せしめながらも、依然として中支に於ける支配的通貨たるの地位を失はなかつたのは、租界の中立性の蔭にかくれて、蔣政權が英米の絶大なる援助の下に法幣の對外價値の安定を策し、自らの傘下にある銀行をして舊法幣の發行を統制せしめ、若しくは自らその統制に當つてゐたからである。然るに事態は一變した、上海の對外經濟關係は遮斷され、對敵地區經濟關係また切斷された。英

米蔣系銀行はわが方に差押へられ、租界の金融はすべてわが統制下に置かれてしまつた。かくて舊法幣は完全にその支柱を失ひ、しかも一切の逃路を封ぜられて、活殺共にわが手中に歸したのである。

これに對し、わが租界支配によつて順境にめぐまれたのは軍票と新法幣である、軍票はもとよりとして新法幣も亦蘇州河以南の地區に於て自由に流通することとなり、その發行額も増加の一途を辿つた。こゝに於て、敵性舊法幣處理による中支幣制統一は絶好の機會に遭遇したわけである。

しかし、こゝで一舉に舊法幣の流通を止めることになれば經濟界の大混亂を免れることが出來ない、そこで當局は一應舊法幣經濟策ともいふべき施策をとり、順次に新法幣による統一を實現すべく努力した。すなはち十二月十日上海金融界の復業に先立ち、財務官當局は次の如く發表した。

十六日以後左記要領により在上海邦人銀行即ち横濱正金、朝鮮、臺灣、三井、三菱、住友大行の上海支店に於て軍票對法幣取引を開始せしむ、(なほ十八日からは漢口、上海兩行も

軍票賣買を許された)

五四

一、顧客の求めに應じ、必要と認める實需の要求のみに限り、投機其他動機不純なる者に對しては賣買に應ぜざること、

一、軍票一千圓以上の取引は財務官の許可を受けたる者に限ること、右許可は直接財務官の許可を受けたると銀行を通じ許可を受けたるとを問はず、

そして軍票對法幣の建値は、差當り正金銀行發表の公定相場によることとなつたが、正金銀行では同日十六日の軍票建値を「軍票賣、二五圓丁度、軍票買二五圓八分の一」と發表した。

この措置の結果、敵側金融政策による支持を失つて暴落に瀕してゐた舊法幣は、軍票にリンクしてその價值維持の根據を與へられた。當時新舊法幣はパーでリンクしてゐたから、こゝに三種の通貨が確定的比率を以て行はれることとなつたのである。

かうしたわが方の通貨策に加へて、支那側銀錢業者の所謂匯割制度の採用、更にまたわが方による上海物資の移動販賣制限等の措置により、進駐直後の豫想された金融界混亂は完全に防止され、従つて中支和平地區全般に亘つて金融界は殆どいふべき混亂なしに經過することが出来たのである。

しかし緩急の相違はあつても來るべきものは來なければならぬ。政策的支柱を失つた舊法幣の價值下落は當然の結果として現れた。すなはち十七年二月中旬の舊正月明け以後中支通貨の安定状態は漸次崩れはじめ、上海市中に於ける軍票相場は昂騰して、三月六七日には遂に舊法幣百元が軍票二十圓臺となつたのである。

軍票相場昂騰の重要な原因は舊法幣不安の樞頭にあつた。といふのは、共同租界工部局が二月十四日以降收支會計を新法幣建に切換へ、これと前後して邦人系紡績會社も同様措置に出で、舊法幣預金の新法幣預金への切替が續出したのである。また、煙草、砂糖、食用油等の軍票建販賣が實施されたこと、上海過剩遊資の投機的出動開始等も附加原因であつた。

三月十日にいたつて國民政府は新舊法幣の等價切離しを聲明したが、實際上に於てはこの聲明に先つて市場の新舊法幣等價關係は破れ、舊法幣の價值は暴落してゐたのである。新法幣は既に舊正月明け以後舊法幣に對して三パーセントのプレミアムがついてゐたが、三月九日以降實施された次の如き措置は、この趨勢をいよいよ促進するものであつた。すなはち三月七日午

五五

後財務官當局は次の如き内容の發表を行つた。

一、從來正金銀行の建てる軍票相場は新舊法幣に共通のものなりし所、今後は専ら儲備券に對してのみ相場を建てることに改めたり、尤も舊法幣も市中相場を基準として軍票との交換を認める。

一、九日の正金建値は儲備券に對し賣二十圓、買二十圓八分の一と決定。

この處置に對して中央儲備銀行に於ては價值下落の必然的運命を負つた舊法幣の受入増加を制限し、同行の負擔を軽減する自衛手段として、新法幣預金と舊法幣預金とを區別し、兩者の換替を認めず、又舊法幣送金の受付を停止し、更に舊法幣の窓口等價交換に對しては一人三百元の限度を守り且つ交換の人員を制限した。

日本側銀行も同日より新舊法幣預金を區別することとなり、支那側各銀行もこれに倣つた。

これによつて、從來舊法幣を通じて軍票と間接的にリンクしてゐた新法幣は直接的關係に於てリンクし、軍票は新法幣の信認及價值維持の支柱となり、舊法幣打倒、新秩序通貨態勢の確立に向つて第一步を印することとなつたわけである。舊法幣は再び政策力による價值維持の支

柱を失ひ、一途没落過程を歩まねばならなかつた。

その後の推移は當然にも軍票及新法幣の舊法幣に對する價值は昂騰に昂騰を重ね、三月七日舊法幣百元が軍票二十圓臺であつたものが、九日に最高十六圓臺となり、十一日には十四圓臺十二日には十三圓臺となり、爾後三月二十一日までは十三、五圓臺に於て動いた、これを新法幣についてみれば、その舊法幣に對するプレミアムは最高三八パーセント買、四二パーセント賣にまで昂つた。

更に三月二十三日からは、中央儲備銀行は窓口等價交換を中止し、別に市中の兩替業者四十軒を指定し、市中相場を參酌した供給レートを以て新法幣を供給し、彼等を通じて一般の新法幣に對する實需に應ずることとなつた。定められた供給レートは舊百元に對し新七十元であつた。そして三月三十日正午、翌三十一日限り新舊法幣の等價切離しを行ふべき財政部布告が發せられ、こゝに通貨統一政策はその第二步を進めた。三十一日儲銀の再開した窓口交換では舊百元に對する新七十七元の相場であつた。

このレートの暫定的維持によつて市場安定策をとつてゐた當局は、しかし、五月十九日以降

急速に新舊の比率を擴大した。そして五月二十六日には舊法幣二對新法幣一の比率が實現してしまつた。

一方、五月二十一日、新法幣對軍票賣相場を二十圓から十八圓に引下げ、二十二日から實施すること、この相場は極力維持を圖るべき旨、日支双方の當局から發表された。いふまでもなく舊法幣全面交換の準備措置である。

かくて舊法幣に對する市中相場が二對一を實現するや、五月二十七日、財政部長聲明によつて、この比率による舊法幣の全面交換の斷行及び江蘇、浙江、安徽三省並に上海、南京地區に於ける舊法幣の法貨性剝奪が闡明された。

全面交換の斷行は三月九日以來の新通貨政策の一轉機を意味する。既に舊法幣の運命がわが方の手に握られて居り、必要ならば直ちにこれを紙屑にしてしまふことも出來たのであるが、それにも拘らず國民政府が二對一の比率を以て舊法幣を回收するの策をとつたのは、民生の安定を思ふが故の親心に外ならない。三月九日以降の通貨政策は幾多の波紋を描いたが、しかし和平地區通貨經濟と民生の安定を實行し得るものはたと國民政府あるのみといふ事實を、上海

の文盲階層にまで認識せしめ、國府政治力の浸透をはかり得たといふ點で、これは重要な意義がある。

兌換期限満了後七月十四日、舊幣整理委員會の發表によれば、全面交換によつて國府財政部が回收した舊法幣は約十一萬二千八百萬元に上つた。この回收額は上海、南京地區に於ては流通額の九割餘、その他の地區に於ては概ね六割餘、清鄉地區に於ては七割に達するといはれた。

さて、全面交換の後に來るものは舊法幣の使用禁止である。それは上海、南京に於ては六月二十五日から實施された。そして、國府は財政部布告を以て舊法幣使用禁止の場合の「使用」の意義を明らかにした。それによれば「禁止使用舊幣辦法」第一條前段にある「使用」とは舊幣を以て下記の各行爲をなすことを指し、授受の如何を問はず双方等しく舊幣使用と認め法により處罰することとなつてゐる。

- 一、舊幣を以て物品の賣買をなしたもの
- 二、同資産の處理をなしたもの

- 三、同旅費、車馬賃、税金の支拂をなしたもの
 - 四、同他の通貨と交換したもの
 - 五、同預金をなしたもの
 - 六、同擔保物となしたもの
 - 七、同債權取立又は債務返済をなしたもの
 - 八、同貸借契約をなしたもの
 - 九、同報酬及贈與をなしたもの
- 舊法幣禁止は次第にその地域を擴大し、新法幣による通貨統一政策は急進展を示した。勿論敵地區、接敵地區に於ける舊法幣の勢力は輕視すべきでないが、苟しくもわが方軍事力、政治力の及ぶ地區にあつて、新法幣は次第に支配的通貨となり、新舊比率は二對一を維持しつゝある。しかし敵地區に對する經濟戰は通貨戰といふよりも物資戰であり、通貨政策終局の勝利を齎らすものは上海乃至和平地區全體の經濟力の擴充であり、その適切なる運用であるといはねばならない。

さて、かやうにして上海に於ける敵性經濟の排除は進行した。米英の支持の下に頑強に命脈を保つて來た蔣政權の通貨は全上海から一掃され、代つて國府側新通貨が確固たる地歩を占めたのである。

敵性文化の掃蕩

こゝでわれわれは目先をかへて少しく文化的な面について見よう。舊上海の英米依存性を最も露骨に表現した敵性文化が、大東亞戰爭の一撃にどのやうな變化を被つたか。これも亦上海の變貌と更生を語る上に、一つの重要な項目に相違ないのである。

文化といへば先づ出版である。中國文化のセンターとしての上海の出版界が、どれくらゐ大きな役割を負うて來たかは、事變前の一年間の全支出版圖書の中、七割以上が上海でなされたといふ事實によつて、端的にこれを知ることが出來よう。殊に新聞雜誌の定期刊行物にいたつては全支の八割以上を占めてゐた。また出版と表裏をなす販賣に於ても上海は全國第一を誇つ

てゐたのである。では事變後はどうかといふに、むしろ益々この傾向は増大したといへよう。といふのは、事變後は所謂抗日的出版物が全支に氾濫し、その殆どすべてが上海の敵性租界を根城として發行されたのである。

尤も出版工場の破壊や取締の強化、紙價の暴騰、購買力の減退等から、事變の永引くにつれて上海出版界の退潮は争はれなかつたが、これは別に上海に限つたことではなく、その比率的大きさには變化がなかつたし、殊に煽動宣傳のための出版にいたつては益々盛んであつた。

この上海出版界が、わが租界進駐によつてどう變つたか、一言にしていふならば、ひと先づ息の根をとめられたのである。

われわれにとつて、これはたしかに痛快なことであつた。戦前、一度足を蘇州河以南に踏み入れるならば、店頭にも街頭にも、日本誹謗の大活字を並べ、愚劣な抗日主義を書き立てた新聞、雑誌、パンフレットの類が、白晝公然、毒々しく賣捌かれてゐたことを思へば、一舉にしてこれを覆滅した租界進駐は、眞に胸のすく痛快事である。假令、新しき上海出版界の建設といふ困難が前に控へてゐるにしても、この敵性出版の運命的な潰滅に對して、われわれは快哉

を叫ばざるを得ないのである。

十二月八日、租界進駐と同時に、昨日まで抗日論調を掲げた新聞雑誌が、或は停刊され、或は改組され、また敵性出版機關はすべてわが方に接收され、抗日書籍の數萬部がわが方に押收されたのであつた。八日以降登記無効を宣言された新聞の國籍別は次の如くである。

中國籍	六	米國籍	七	英國籍	二	獨逸籍	一
中米籍	一	計	一七				

また八日以降登記證を返還した新聞は左の如くである。

中國籍	一三	米國籍	一	獨逸籍	一	計	一五
-----	----	-----	---	-----	---	---	----

八日開戦と同時に發行停止となつた主なる新聞を挙げれば、デーリーニュース、チャイナ・プレス、イブニング・ポスト、大美晩報、中美日報、正言報、申報、神州日報、大晩報、新聞報、新聞夜報、モルゲンポスト、チャイナ・ウイクリー、レヴュー等であるが、その中イブニング・ポストは十二月九日に、申報及新聞報は十二月十五日に、それぞれ和平を誓つて再刊を許されることとなつた。これら諸紙の中重要なものの内容は大要次の如くである。

申報（米國籍）創刊以來六十年、華字新聞中最古のものである。重慶政權の上海に於ける機關紙であるが、表面中立を装うてゐた。（再刊）

華美晚報（米國籍）民國二十五年創刊、一時和平色を見せたが再び中立を標榜した。

正言報（米國籍）民國二十九年創刊、表面中立を標榜してゐたが事實上重慶側機關紙であり、工部局から屢々停刊を命ぜられさへした。

大美周報（米國籍）重慶的色彩濃厚であつた。

大英夜報（英國籍）抗日反南京的傾向強く中國共產黨と密接な關係を持つてゐたが、發行部數は五千部に過ぎなかつた。

新聞報 光緒十九年創刊、重慶的色彩が強かつたが、表面商業主義的にカムフラージュしてゐた、發行部數約七萬。（再刊）

中美日報（米國籍）民國二十七年創刊、重慶CC團の機關紙で甚だ抗日的であり、度々發禁處分にあつてゐた。發行部數約一萬五千。

大美晚報（米國籍）民國二十二年創刊、英字紙イヴニングポストの華字版として抗日色頗る

強かつた。發行部數二萬八千。

大晚報（英國籍）民國二十一年創刊、重慶色濃厚。發行部數一萬五千。

これら抗日華字新聞がどれも米英籍となつてゐたのは、わが方及南京政府の干涉、彈壓をさけるためであつたことはいふまでもない。

更に、十二月八日以後發行停止となつた雑誌の國籍別は次の如くである。

中國籍五五 米國籍一〇 英國籍九 ソ聯籍二
獨逸籍四 國際五 計 八五

また、自發的に發行を停止した雑誌は次の如くである。

中國籍三一 米國籍一 英國籍一 獨逸籍二
ソ聯籍一 計 三六

これらの中、上海週報ザ・ウィークリー、レヴュー等が最も規模大きく影響力を持つてゐた。かくして、戦前の花形新聞雑誌の多くは停刊となつたわけであるが、その後發行されつゝある新聞雑誌の國籍別を示せば左の如くである。

一、共同租界新聞

中國籍	五	米國籍	二	伊太利籍	一	ソ聯籍	三
獨逸籍	一	英國籍	一	獨系ユデア	一	計	一四

二、共同租界雜誌

中國籍	四四	米國籍	三	英國籍	二	獨逸籍	二
伊太利籍	三	ソ聯籍	二	日本籍	五	勃國籍	二
葡國籍	一	計	六四				

三、佛租界新聞

ソ聯籍	四	中國籍	一	佛國籍	一	露系ユデア	三
ウクライナ	一	計	一〇				

また、現在發行されつゝある新聞の主なるものを挙げれば次の如くである。

新聞報（米國籍）發行部數六萬部 申報（米國籍）四萬部 中華日報（中國籍）四萬部
 平報（中國籍）二萬部 國民新聞（中國籍）三萬部 新中國報（中國籍）三萬二千部

この他に約四十種の小新聞があるが、これらは多くエロ的なもので、風教上から見ても紙數統制の上から見ても、當然整理される運命にある。發行部數も一千部内外にすぎない模様である。

以上が定期刊行物肅正の概況であるが、これを單行本について見るならばどうであらうか。

先づ、敵性出版宣傳機關たる「抗日書業公會」加盟の書店、印刷所等十五ヶ所、その附屬倉庫三ヶ所が接收された。すなはち商務印書館、同倉庫、同製本工場及倉庫、同書館分館、中華書局、同編輯所、同印刷所、大東書局、大東印刷所、生活書店、兄弟圖書雜誌公司、世界書局、開明書店倉庫、光明書店等である。

商務印書館、中華書局、世界書局は中國出版界の王座を占めてゐたものである。事變前（民國二十五年）の全國出版物誌數は九、四三八であるが、その中、商務が四、九三八、中華が一、五四八、世界が二三一、合計六、七一七で、全國の七一パーセントを占めてゐたわけである。

これら抗日書店は改組更生の上一月二十五日から再開を許可されたが、現在なほ沈滞のどん

底にある。其他の小出版業者も同様状態である。といふのは、第一に経済的困難がある、戦争前までは出版物が奥地方面に大量に輸送されて廣汎な需要があつたため、一部有力財界人が財政的援助を與へてゐたのであるが、奥地との流通が遮断されて後は若干の投機筋が援助してゐるに過ぎず、これすら取締強化のため漸次減退の傾向を辿らざるを得ないのである。第二に紙類の統制による原料難がある。第三に實はこれが最大の條件であるが、文筆業者の沈滞である。戦前までは奥地文化人との交通もあり、また上海在住の重慶ジャーナリストも活動してゐた、そして評論にせよ文學にせよ、多少共抗日主義を精神としてやつて來たのである。所が戦争は奥地との交流を遮断し、抗日的文化人を逃避せしめ、出版界の抗日的精神を排除彈壓してしまつた。そこに來るものは當然文筆業者の低調であり沈滞である。上海出版界の過渡的低迷の裏にはこの重要な事實がある。敵性排除の後に來るべき出版の再編成は他の文化面のそれと同じく、緊急なる文化的課題となつてゐるのである。

しかし、敵性出版の掃蕩に來るべき新上海文化の建設は、出版業者、文化人の自覺によつて、今やその萌芽を見せはじめてゐるといつてよい。最近の出來事として、上海の出版業者、

書店を中心とする新しい文化運動として「出版聯合協會」が設立され、中國文化の向上、日本文化の紹介のために乗出して來たが、これなどは適切に上海出版文化の新しい動向を示すものといふべきであらう。前述の如く上海の出版業は全支出版界の九割を占めて來たのであり、その勢力たるや實に大きい。この上海の出版業者が久しい休止の後積極的活動の態勢をとりはじめたといふことは、國府政治力強化のためにも、日支友好關係の促進のためにも至大の意義を持つものである。

次に放送事業に於ける變化について見よう。

戦前、上海には約三十の放送局があつた。ラヂオが民間事業として許されてゐる點、日本内地とは全く事情を異にする。これら濫設された放送局が、各自勝手氣ままな番組でラヂオ競争を展開してゐたのである。尤もその中の中國籍電臺はわが方の監督下におかれ、抗日ニュース等の放送は完全に禁止されてゐたが、米英籍の數局は新聞雜誌と同様に、その特殊權益の名の下に、依然として反日ニュース其他の敵性放送を續けてゐたのである。

然るに十二月八日、皇軍の租界進駐と同時に、中國籍、米英籍放送局は一齊に放送を停止さ

れた。その後、いたつて再開を許されたものは舊米國籍XMH C (大美晚報) 及び同じく舊米國籍XMH Aの二局にすぎない。結局現在では合計七つの放送局が存在するにすぎないのである。

日本、國民政府、及び盟邦獨伊その他第三國側のものを除いた上海放送局の、十二月八日之境とする變化は要するに中國語放送の全面的消滅と、英語放送二局の復活である。勿論、英語放送二局の復活とはいつても、英語=ユース其他の内容は、戦前のそれと全く面目を一新し、上海に於ける敵性放送は完全に拂拭され終つたのである。

現在上海に存在する七放送局の國籍、波長、用語等を一覽すれば次の如くである。

FFS (佛國籍) 短波及中波 用語 佛語、英語

XGRS (獨逸籍) 短波及中波 用語 獨語、露語、佛語、英語、北京語

XTRS (伊太利籍)

XRVN (ソ聯籍) 短波及中波 用語 露語、英語、獨語、北京語

XMHC (戦後再開) 中波 用語 英語

XMHA 東亞電臺 (戦後再開) 短波及中波 用語 英語

上海放送局 (中國籍) 短波及二種の中波 用語 中國人向第一放送は北京語、上海語、廣

東語、英語、日本人向第二放送は大部分日本語で英語=ユース、上海語=ユースを含む

かうした陣容で、大東亞戦下の上海放送界は再編されたのであるが、これに對してはなほ若干の論議もある。その一つは、英語放送が抗日的内容を持たぬにせよ、あまりに多く英語が用ゐられて居り、これが中國人に及ぼす心理的影響を考へねばならぬといふものである。これらについては更に慎重な検討が加へられねばなるまい。

以上、出版、放送の部門に於ける文化的變化の概略を見た。更に進んで文學、演劇、映畫等あらゆる文化部門の變化について見る必要があるかも知れないが、ここではそこまで觸れず置く。兎も角も大東亞戦の勃發によつて上海の敵性文化に無條件的降伏と更生の再出發が要求されたといふ事實は、以上によつて既に大略明らかであらう。

3 起ち上る上海

逞しき再建への進發

開港以來百年、米英が東亞進出の根據地として、租界、治外法權の特權の下に築き上げた陸性上海は、大東亞戰爭の一擧によつて根柢的な打撃を加へられた。昭和十六年十二月八日。この日こそ大上海にとつて眞に記念すべき日である。永い植民地的屈辱の歴史を清算して、自主獨往の精神による「東亞の上海」として起上るべく偉大なる契機を與へられたのである。

まことに、上海は起ち上らねばならぬ。全國と共に、全東亞と共に、米英的支配の鐵鎖を斷ち切つて起上らねばならぬ。

もとよりそこには並々ならぬ困難が横はつてはゐる。それは過去の米英依存の一朝に克服し難い情性が大きく働いてゐるからだ。延長十二萬八千呎、廣さ七・五平方哩に及ぶ大上海港域の六割は、かつてユニオン・ジャツクと星條旗の支配する所であつた、全上海四十五萬坪の倉庫の中、二十萬坪以上が米英系の占める所であつたといへば、上海港に於ける彼等の勢力がど

れ位のものであつたかを想像出来よう。そして上海工業の原料八割は海を渡つて米英の版圖から来た。工業製品の八割はこれ亦彼等の手によつて或は重慶治下へ、或は彼等の版圖へと持去られた。斯の如く米英的資本、米英的生産、米英的貿易の上に過去の上海の繁榮が築かれて来たとすれば、この過去を清算して自主的體制に立直るといふことが、如何に多くの困難を含んでゐるかは了解されよう。

しかも上海は起上らねばならないのだ。眞實の意味に於ける全支の經濟的、文化的センターとして、また、新しき大東亞への戦ひの兵站基地として、今こそ上海は起たねばならないのだ。

ここに於て、現地官民並に國府傘下の人々の一體的協力に依る新しき上海への逞しい努力は開始された。わが軍の租界進駐と同時に、またこれに引續いて行はれた敵性掃蕩の措置については既に一通りこれを見たが、敵性彈壓の後に來るものは、上海の建設的自主的體制の確立といふことでなければならぬ。このためには何よりも第一に上海在留十萬日本人の中核體としての奮起が必要であつた。四百萬上海市民を導いて過去の迷夢から覺醒せしめ、その總力を舉

げて新東亞建設への方向に結集すべく、日本人はその中核とならねばならないのである。その意味に於て、現地總力戰體制としての「上海總力報國會」の結成が注目される。

新上海建設への政治的推進力を確立すべしといふ要請に基いて、昭和十七年一月一日、官民一致の協力によつて結成されたのが「上海總力報國會」である。同會結成と共に發表されたその基本要綱及び當面の實踐要項を示せば次の如くである。

「基本要綱」一、肇國の大精神に基く大東亞建設理念の徹底 一、大東亞建設教育の徹底並に大東亞建設國民道德の確立 三、日華共同前進體制の整備 四、健全家庭に基く隣保組織の完成並に之を基底とする現地國民組織の確立 五、現地行政機構運用の刷新と統一並に各種團體の統合整備 六、決戦生活の確立並に國民的厚生諸施設の實施 七、國民資質の向上並に國民體力の増強 八、現地計畫經濟の遂行とその統制機構の整備 九、生活必需物資の確保並に適正配給機構の整備。

「當面の實踐要綱」一、戦時認識の徹底を圖る、方策、啓蒙運動の展開、時局研究の促進 二、國民組織運動を積極的に推進す、方策、隣保組織、職域組織の整備確立 三、總力體制

樹立に對し各職各層の人士の協力を要望す、方策、懇談會の開催 四、本運動推進のため指導者養成を急速に實施す、方策、指導者講習會の開催。

この要綱に基いて、報國會は全在留邦人に呼びかけ、強力にその運動を推進めたが、十七年秋、上海青年團が解消し、その全機能を擧げて總力報國會に合流したことにより、一層強化され、現地邦人の一元的報國運動組織として猛活動を展開しつつある。

更に、右總力報國會の結成と並んで特に注目すべきものは、保甲制度の全市に亘る實施である。

支那事變後上海に重慶テロが横行し、これがために斃れる邦人、華人の数が少からぬ數に上つたことは前述の通りであるが、これが對策としては民衆自體の自警的防禦によらねばならぬといふことになり、昭和十六年八月日本側の警備區域であつた虹口、揚樹浦地區にはじめて保甲自警團が組織され、その活動により蘇州河以北の地區には漸次テロが影をひそめるにいたつたのであるが、しかし蘇州河以南の地區にはなほ自警團の組織がなくテロが横行してゐた。こゝへ起つたのが十七年二月十四日舊大晦日の夜のテロ事件である、我軍は間髪を入れず出動し、

蘇州河以南、愛多亞路以北、虞洽卿路以東、河南路以西の廣大なる地區に亘つて嚴重封鎖を斷行したのであるが、これが契機となつて先づ老門區に保甲制度が實施され豫期以上の好成績を収めた結果、これを蘇州河以南地區全部に擴大することとなつたのである。

保甲制度の形は内地の隣組、町内會のそれと相似たものであるが、その目的とする所は主としてテロ防止である。保、甲の住民はその保、甲内に起つた事件について共同の絶對的責任を負はねばならないのである。或る保甲にテロ事件が起る、若しくはテロ犯人が遁入するといった場合、その保は封鎖され、保員は責任を以て犯人を検舉せねばならぬ、犯人検舉までは封鎖が解かれないといふことになるのである。すなはち市民の自主的警備によつてテロ事件の絶滅を期したのである。

蘇州河以南の保甲制度實施については、二月二日保甲準備委員會が結成され、主席に參事會議長袁履登氏、副主席に余華龍、周邦俊兩氏が推された、この會議では各警察所管區域を單位として、組織を進めることとなり、七警察區域を三十二聯保に分ち、各區に總聯保長を置いて聯保の責任者とし、以下聯保長保甲長となつたわけであるが、保甲自警團の統轄は警視總監が

行ふことゝなつた。十四日準備委員会は發展的解消を遂げ、これに代つて参事會の常設委員會の一つとして保甲委員會が任命された。これは保甲制度に關する最高機關で、岡崎参事會議長が自ら委員長に任じ袁履登、余華龍、A・グラデーの三氏が委員となつてゐる。その執行機關としては警察本部内に保甲指導部を設置し、その諮問機關として保甲指導委員會が設置された。十月二日には保甲條令も公布され、保甲制度に法的根據が與へられることゝなり、こゝに保甲制度はほゞ完成された。

保甲制度は上海に於けるわが方の施策の中で最も成功したものの一つであり、また保甲自警團は上海市内で最も行人の注意を惹く存在である。開北の難民區といはず、南京路の繁華街といはず、あらゆる辻、あらゆる路次の入口に大きくて一坪位、小さくて半坪位の番小屋が立てられ、交替で警備に當る自警團員が、細引と棍棒に武装して詰めてゐる。それが虹口の日本人町ならば銘仙にエプロンの娘さんも居り、楊樹浦のユダヤ街ならば見るからに薄汚い鉤鼻の老人も居る。しかし多くは頼もしげな支那青年である。夢中で本を讀んでゐるものもあり、半分居睡つてゐるものもある。道を聞けば必ずていねいに教へてくれる。これはたしかに新しい上海を

示唆する一風景である。

保甲條例中には青年組織及訓練に關する規定があるが、これは保甲指導委員會を中心に着々進捗し、既に大略その基礎を完成した。また、保甲制度の中で重要な働らきをしてゐるのは保甲衛生班である。これは蘇州河以南共同租界の衛生機關を總動員したもので、租界内の華人醫師はこれに加入する義務を負はされてゐる。

保甲自衛團が活動を開始してから共同租界の治安が大いに改善されたことは疑もない事實で、これによつて過去上海の治安を脅したテロは全く消滅することゝなつたのである。試みに昭和十七年一月から九月までの統計を示せば次の如く、八月九月にいたつて兇惡犯罪は皆無といふ好成绩ぶりである。

	兇惡犯罪發生數	檢舉率
一月	一一九	二八・四七%
二月	九六	三九・〇二%
三月	五九	二九・二六%

四月	一三三	五〇・〇〇%
五月	七	二八・三七%
六月	六	三三・三三%
七月	三	六六・六六%
八月	一	一〇〇・〇〇%
九月	一	一〇〇・〇〇%

かくして上海の治安は確立された。これを大東亞戦前の暗黒状態に比較するとき、眞に隔世の感ありといはねばならない。この統計の示す数字こそ起上る上海の明朗なる姿に外ならないのである。

勿論總力報國會といひ、保甲制度といひ、いづれも現地官民の努力の僅かな一例にすぎない、或は生産の復興のために、或は經濟體制の再編のために、あらゆる部面に亘つて幾多の努力が拂はれ、舊上海の情性は徐々にしかし力強く克服されて行つたのである。

大東亞省の生誕、現地機構の飛躍

かうした上海の變貌に對して、更に清新な活力を與へたものは、十七年一月一日、大東亞省の生誕である。これはいふまでもなくわが共榮圈建設政策の一步前進を意味するものであり、これによつて現地機構も亦大きな飛躍を遂げることとなつたのである。

大東亞省はその設置要綱の示す所によれば「大東亞戦争の完遂並に大東亞建設の必成を期するため、大東亞地域内の諸外國及諸地域に關する政務の施行を擔當すべき一省」であり「且つ之に即應する現地機構を整備充實せんとす」るものであつて、その中央機構は「大東亞地區に關する政治經濟文化等諸般の政務の施行に關する一元的機關」であり、その現地機構は「大東亞地域に於ける大公使其他の現地機關は之を統合」して成る所の一元的機構である。

元來の大東亞省設置は、内地に於ける行政簡素化と同時に、これと共通する趣意を持つて行はれたものであつて、その狙ひの中心は所謂内外地を通じての行政改革に他ならない。從來

外地行政に於て最も大きな障害は、その機關が中央出先共多元的な複雑な機構を持ち、すべての施策の迅速圓滑な實現を妨げてゐることであつた。大東亞省の新設はこの障害を打破して、いよいよ重大化する外地行政殊に日支提携による大陸建設のより速かにより健實ならんことを期したものである。

この大東亞省新設によつて、在支大使館、總領事館、領事館等の外務省出先機關並に興亞院各連絡部及出張所は新たに大東亞省の出先機關として統合され、十一月一日から新發足したのであるが、その改革の要點を示せば次の如くである。

一、大使館の權限擴充

從來特命全權大使は管下各領事館に對し、單に監督權を有するだけで直接指揮命令を行ふ權限はなかつた。即ち管下領事館に對する指揮命令權は大使にはなく外務省本省がこれを握つてゐた、従つて大使が管下領事館の職務執行について特定の事項を命じようとしても、一應これを本省に移牒し本省から改めて出先領事館に指揮命令が發せられるやう計らふ以外はなかつたのである。然るに今次改革によつて、大使は直接管下の領事館に指揮命令し得ることとなり、

事務の最も敏活なる處理が可能となつたわけである。

二、出先機關の一元化

從來在支出先機關としては外務省、興亞院の二本建であつたが、これが大東亞省出先機關として一元化された。これは行政簡素化體制の上からも人材活用の上からも意義極めて重要である。從來興亞院連絡部は特殊會社の監督をはじめ現地物動關係の事務を擔當してゐたに對し大使館は直接國民政府と折衝その育成強化を當面の任務としてゐた關係上、兩者の關係は表裏一體をなすものでありながら、出先機關としては勿論中央機關をも異にするため屢々會議を開き折衝を重ね或は東京の中央機關を通じなければならぬといふ不合理があつたのであるが、大東亞省として兩者の統合が實現した結果右兩部門の仕事が一本となり國策遂行上の不合理が排除された。

三、陸海軍現地機關との連絡強化

現地軍機關と大東亞省出先機關との緊密な連絡の必要はいふまでもないことであるが、新機構によつて南京上海、北京、張家口の各大使館事務所には一部現役軍人が参加し作戰部隊との意

志の疏通を圖る他、大東亞省職員が軍の機關に兼務する等の方法も考へられ、兩者の關係はいよいよ緊密を加へることゝなつた。

そこで、この新官制が、實際に在支機構の上にあらはれた所はどうかであつたか。

大東亞省設置に伴ひ、支那が大東亞共榮圈建設の中樞たる重要使命を有する點に鑑み、在支大使館の機構は著しく擴充強化されることゝなつた。そして面目を一新した新機構は次の如く大使を中心として在支出先機關の協力態勢が完成され爾後の有機的活動が期待されるにいたつた。すなはち重光大使の下に常時大使を補佐して重要事務を統裁する公使を一名置くことゝし、これには前上海駐在公使兼總領事堀内公使が任命された。また、新に審議室を設けて大使の所管に屬する重要政務を審議し大使に具申する仕組とし、大使館勤務の公使、參事官、陸海軍武官を以てこれを構成、議長及幹事を置くことゝなつた。審議室の陣容は議長堀内公使、幹事村中參事官、落合陸軍、代谷海軍兩武官其他で、また武官補佐官を任命して所管事務の處理と軍側との連絡に當らしめることゝなつた。

そして、南京大使館の強化と共に、上海、北京、張家口にはそれぞれ大使館事務所が設置さ

れ、各事務所長官として公使がそれぞれ任命された。上海駐在公使としては外務省調査部長田尻愛義氏、北京には鹽澤前興亞院華北連絡部長官、張家口には岩崎前興亞院蒙疆連絡部長官が、新機構下の新使命を負うて着任したのである。

大略以上の如くにして現地機構の新態勢は整備されたが、上海大使館事務所が新たに引受けることゝなつた任務の重要さはこれによつても推察されるのである。しかもこの整備と共に大東亞大臣は田尻公使に訓令を發し、中支那振興會社の業務を監督せしめることゝした結果、同會社をはじめ關係各社の中支開發事業を促進するものとして重大期待が寄せられるにいたつた。すなはち大東亞省設置以前に於ては、中支那振興會社關係の新規事業並に各種施策は一應中央にこれを申請しその許可を俟つてはじめて實施されてゐたのであるが、そのため急速を要する開發事業が遅延する如き遺憾も少からず、その對策が要望されつゝあつたに對し、上海駐在公使が中支那振興會社を直接監督することにより、同社の新規事業は現地の許可のみで直ちに實施し得ることゝなり、從來の弊は一掃されて、戰時的運営が可能となつたのである。

かくて上海大使館事務所が中支經濟再編成のために擔當すべき任務は益々重大である。それ

は、大東亞戰勃發以來應急對策の時期を過ぎた建設期中支經濟運營の一元的中樞機關として生誕したのである。特に上海地區に於ける日支新經濟體制の確立は一に上海大使館事務所の指導と施策を中心として推進されねばならないのであつて、上海の更生過程に於ける大東亞省新設の意義も、實はこの強力な一元的現地機關の出現といふ點に要約されるといつて差支へないのである。

新しき現地機關の建設的構想

大東亞省の創設、現地機關の飛躍的改編によつて、新上海建設の中樞指導機關として出現した上海大使館事務所は、その負荷する重大任務に對して、果して如何なる構想と抱負を抱いたか。これについては、新機構の長官として來任した田尻公使の述べる所に聞くことが最も適切であらうと思はれる。

十一月三日、空路上海に到着した田尻公使は宿舎ブロードウェイ・マンションに入り、翌四

日新聞記者團に會見の後、上海大使館事務所に初登廳を行ひ、二階大講堂に六百余名の全廳員を集め、着任の挨拶をしたが、ここに大東亞省機關としての大使館事務所の新使命と、在留邦人の指導的位置に立つものとしての廳員の心構へたるべき所が示されてゐる。公使挨拶の要領を記せば次の如くである。

「この度大東亞省が創設され大東亞建設の重要任務が遂行されることとなり中華民國は出先機構とその運用とが一元化綜合化されたこと並にその官制については諸君の既に承知する所である。思ふに大東亞省は寄合世帯である、當事務所も亦寄合世帯である、しかし大東亞省が新しい使命を持つものであると同様本事務所も亦新しい使命を持つものであることを考へなくてはならぬ。興亞院は解消され、また大使館領事館の名稱は残つてゐてもこれは外務省のものでなく大東亞省の大使館領事館であることを考へ、過去の出身、過去の事務を語らず、外務省精神、興亞院精神を合體した大東亞省精神をお互の協力で造り上げる氣合で進みたい。青木大東亞大臣の挨拶の中にも「新しい寄合世帯ではあるが人の和を得て造り上げ大東亞精神で進んで行きたい」と述べてをられ、さらに希望條項として人の和を得ること、

事務の簡素能率化を圖ること、官紀の振肅のことをあけてをられるが、現地に於ては殊に中國人、第三國人との折衝が多い、我々は常に正しく在留民に對して範を垂れて行くといふことが極めて大切である。特に三希望條項中の官紀の振肅は今後官吏としての仕事の上に絶えず心にとどめてゐて頂きたい。我々は蘇、浙、皖三省の領事を統轄すると同時に中南支にもその指揮は及ぶ、北支、蒙古には我々と同じく南京大使館の直接指揮下にある同僚機關があり、全く新しい機關として登場したわけである。以上大略の希望をのべたが、私は勿論諸君たちとともに歩調を合せ、出来るかぎり面倒も見たいと思つてゐる。固い半面も軟かい半面も持つてゐることを了解して頂き、親しい氣持でこの建設事業に邁進したいと思つてゐる次第である。」

かくて新機關は堂々たる力強い第一步を踏み出したのであるが、その建設的構想については、十二月八日、大東亞戦争一週年に當つて田尻公使の公にした次の一文に於て最も明らかである。公使はここで年來抱持する信念の一端を示し、世界的大日本としての現下日本の新地位をすべての日本人が自覺して、この大國民的自覺の上に眞の日華提携、日華協力を實現すると

きはじめて上海の經濟的再建も可能であることを主張したものである。

「大東亞戦争は本日、を以て第二年に入つた、顧みれば去年の今日我々一億同胞は絶大なる感激を以て米英に對する宣戰の大詔を拜し必勝の信念を誓ひ不退轉の覺悟を固めたのである。爾來一年御稜威の下陸海軍の精銳は陸に海に空に壯烈鬼神を泣かしむる力戰を敢闘して世界戦史に比類なき赫々たる戰果を挙げ、米英の實勢力は大東亞より完全に撃摧驅逐せられ、大東亞は今や東洋本然の道義の基礎の上に各般の建設を進め、東亞の歴史、世界の歴史は明白に大轉換を示しつつある。

大東亞戦争の根本の責任が米英の日本に對する脅威、東亞に對する侵略、更に彼等の世界制覇の野望にあつたことは開戦前に於ける幾多の事實の證明する所であり、開戦後例へばアメリカ上院の査問委員會の報告の如き自白によつて更に確證されたのである。我々は同盟國と協同しこの米英の世界制覇の野望を撃摧せぬ限り飽迄戈を收めず戦ひ抜くのであるが、彼等はその資源と生産とを頼んで彼等本位の利己的物質文明と舊體制の殻を守らんがため、外交の巧言好餌の奥の手を以てその陣營の補綴に狂奔しつつある。固より彼等の文明は道義の

生命力を失つたものであり、その陣營は同床異夢自然崩壊の運命を辿るものである。然し我々としては勝つて驕らず、愈々必勝不敗の態勢を整へ、同盟國間の協力を固くし、全力を傾倒して敵の企圖を葬り去り、之れに永遠の終止符をうつことが必要であり、之が爲には所謂大東亞共榮國の完成が更に重要性を加へて來るのである。

幸にして我が隆國の道義の光被する所、國民政府は固より滿洲國、泰國をはじめ東亞諸民族は欣然として建設に協力し着々としてその成果のあがりつつあることは、大東亞戰爭の世界史的意義を雄辯に物語るものであり誠に喜ばしいことである。

斯る狀勢下に於て開戦第二年に入るに當り、茲に我々が認識を新たにすべき二つの問題がある。第一に今や日本は島國日本に非ず大東亞の日本であり、世界の日本であることである。即ち世界史を轉換する道義的生命力と破邪顯正の力とを兼備する日本であることである。島國日本から世界の日本となつた日本にはそれだけの自信と貫祿があるのである。しかしそれは同時に我々日本人が個々に持つべき自信であり貫祿であつて、大國民の襟度といはれるものは即ちこれである。かくて國家としての日本にも個人としての日本人の考へ方にも

動きにも綽々たる余裕が出て來たのであり、また斯くして眞の日華提携、現地的にいへば日華協力による上海の産業再建設の如きも出来るのである。

勿論この日本の新地位は我々の努力によつて維持せられ啓發せられるものであつて、萬々一我々の努力不十分ならば我々は自ら光輝ある歴史を潰すものである。このことがはつきりするならば、我々は愈々滅私奉公の誠を竭すべきであつて、我々の努力は今日に數倍數千倍したものとなるであらうし、我々日本人にとつて上海は偷安の生活を追ふ場所ではない。上海は第一線の直後にある銃後の産業戰士のための日華提携、中日協力の鍊成場である。

第二に我々の頭の中には未だ米英の物質文明的な利己主義、自由主義的な惡が巢くつてゐるが、これは速かに清算されねばならない。我々は數十年來無批判に米英式な思想によつて教育され、無條件にさういふ思想を背景にした生活に馴らされて來た。このことは中國人についても同様にいへることであるが、従つて米英勢力の擧擢といふことは、兎角軍事的、經濟的のみ考へられ易いのである。しかし、米英の擧擢は文化的、思想的に米英的な惡を清算してはじめて完きを得るのである。我々は中國人と共に今や東洋本來の道義を基礎とした

東洋思想の昂揚を目指すべきである。

數千軒に亘る戦線に於て、或は寒風に曝され、或は熱風に吹かれて、皇軍將兵は日夜辛苦を重ね、大東亞の防衛、新日本の建設に邁進しつつある。我々はここに衷心感謝の念を新たにすると共に、我々も亦經濟戰に於て思想戰に於て、前線の將兵と同じ氣持になつてこの世界戰を戦ひぬき、勝ちぬく覺悟を更めて誓ふ秋である。」

これを要するに、日本及日本人はその對支提携政策に當り、大國民の襟度と余裕を以て行動すべきこと、そしてまた中國人と共に過去の米英的思想の惰性を拂拭すべきことである。ここに新しき現地機關の新上海建設に於ける根本的構想がある。そして、恰もその後に来つた國府參戰に伴ふわが對支新政策の實施は、この構想に合致し、これを更に實踐的に推進めたもの以外ならなかつたのである。われわれは次にわが大陸政策の劃期的前進としての對支新政策について見よう。

國府參戰とわが對支新政策

昭和十八年一月九日、國民政府はわれらの敵米英に對して敢然戦ひを宣し、ここに軍事的にも日支兩國は共同の戦線に立つこととなつた。

國府は何故參戰したか。いふまでもない、米英の東亞に對する妨害を徹底的に排除することなくしては、新中國の建設も新東亞の建設もあり得ないことが今や明白となつたからである。

大東亞戰爭勃發以來、國府は直接戰爭に参加してはゐなかつたが、東亞の盟邦として種々の角度からわが國の戰爭遂行に協力して來た、名は中立國であるが、戰爭勃發と同時に其の聲明にもある通り「同甘共苦」の精神を以て、戰爭に中國の役割を果すべく努力してきたのである。然るに米英兩國はその傳來の東亞政策に基いて益々重慶との結合を固め、國府治下の平和を攪亂してその建設工作を妨害し、進んで重慶側の航空基地を利用して漢口、廣東附近を爆撃し、無辜の民衆を殺傷するの暴舉に出た。ここに於て、國民政府として中立を維持するこ

とは彼等の無法によつて自國民の犠牲となるのを傍觀する事になり、且又彼等の走狗たる重慶の増長を許すことになり、國府樹立の趣旨に反するものである。すなはち東亞共同の敵に向つて國府は斷乎戈をとつたのであつた。

ここでわれわれの注意せねばならぬことは、參戰によつて國府が日支關係に於けるその立場を一步高めたといふ點である。參戰以前の國府は日本にとつてよき後援者であるに過ぎなかつた。しかし參戰後の國府は明らかに日本の共同者である。そこに當然の結果として新しい日支關係といふものが生じなければならぬのである。それは從來の「善隣友好」「同甘共苦」から更に進んだ共同關係であり、所謂「同生共死」の關係である。

この新關係は參戰と同時に調印された「戰爭完遂についての協力に關する日華共同宣言書」によつて先づ表現された。その全文は次の如くである。

戰爭完遂ニ付テノ協力ニ關スル日華共同宣言書

大日本帝國政府及中華民國國民政府ハ兩國緊密ニ協力シテ米英兩國ニ對スル共同ノ戰爭ヲ完遂シ大東亞ニ於テ道義ニ基ク新秩序ヲ建設シ惹テ世界全般ノ公正ナル新秩序ノ招來ニ貢獻セン

コトヲ期シ左ノ通宣言ス

大日本帝國及中華民國ハ米國及英國ニ對スル共同ノ戰爭ヲ完遂スル爲不動ノ決意ト信念トヲ以テ軍事上、政治上及經濟上完全ナル協力ヲ爲ス

昭和十八年一月九日即チ中華民國三十二年一月九日南京ニ於テ

大日本帝國特命全權大使 重 光 葵

中華民國國民政府行政院院長 汪 兆 銘

われわれはこの宣言が從來の條約若しくは協定の如きものとそのなり立ちを異にし、それぞれの自主的意志に基く共同の宣言であるといふ點に新しい意義を見出さねばならないのである。すなはち兩國の關係は既に權利義務を以て規定すべき間柄ではなく、自發的に互に助け合はうといふ共同關係にまで高められたのである。

ところで、この新しい共同關係は、必然に從來のわが對支政策の一步前進を要求するものである。國府は既に日本の後援者ではなくして、自主的な共同者である。従つてそこには國府の自主的共通を眞に可能ならしめる如き態勢が與へられねばならないのである。この必然的要求

に従つて實現したものが、すなはち所謂對支新政策であつて、共同宣言の調印と同時に、兩國間には更に租界還付及治外法權撤廢等に關する新協定が結ばれたのであつた。

あらためていふまでもなく、治外法權と租界の存在こそは百年來の米英の東亞侵略の名残りであつて、支那が清末革命の後あらゆる機會に脱却しようとして果し得なかつた束縛である。そしてわが國は既に昭和十五年の「日華基本條約」に於て、將來に於けるその廢棄を約しつゝあつた所のものである。

この租界還付、治外法權撤廢が遂に實踐に移されたといふことは、わが國側としては重大英斷であり、日支關係の新段階に即應するわが國の對支態度の表現に外ならないのである。こゝで新協定の内容の概略を紹介すれば次の如くである。

一、日本專管租界については、天津、漢口、廈門、蘇州、杭州、沙市、福州及重慶の八ヶ所の日本租界全部の行政權を國民政府に返還すべく、兩國からそれぞれ委員を出して必要事項につき協議せしめる外行政權が中國側に移つた後にも、その地域内に日本人が住むこと、營業すること、及び日本人に對する厚生上の施設等については、日本が治めてゐた時代に比

較してその程度を下げないことが定められた。

二、上海と廈門にある各國の共同租界及び北京の公使館區域に於ても現在中國の行政權は行はれてゐないのであるが、これは日本のみの關係ではなく、獨りで還すといふわけには行かず、日本は國府がこれらの地域に於ける行政權を關係各國から回收することを承認し且つそのために努力する旨を明らかにした。

三、治外法權については日本が自身その撤廢を決定したので、その實施上必要な事項を協議すべく兩國の混合委員會を設けることを定めた外、中國側はわが國の撤廢に應ずる措置として、從來日本人がその居住營業を一定の地域に限られてゐたのを改めて、中國の領土全體を日本人の居住營業に解放し、更に、日本人に對しては普通外國人に加へられる各種の制限を免除して、自國の國民より不利益な待遇を與へないことを定めた。

協定の表面に表はれたものとしては、この租界と治外法權との二項目であるが、協定の精神とする所は實に前記の如き兩國の自主的共同體制の確立にあり、その意味に於てこの協定の意義は重大である。九日の日本政府聲明に於ては、この協定に關し、今後日華兩國新關係の發展

に應じて、これまで兩國間に結ばれた種々の條約等の約定についても、今回の協定と同じ精神で検討しようといふことが述べられて居り、また同日の東條總理の談話中には、租界や治外法權の問題のみならず、支那にある英米財産の取扱ひについても好意を以て當ることに決意し、直にその方法をとつたといふ意味の言葉がある。これらを通じて九日の協定の精神がどこにあるか、そして新段階に應ずるわが新政策の如何なるものであるかを知ることが出来よう。

實に、國府の參戰とわが對支新政策の實踐とは、兩國關係に於ける大きな飛躍であつた。國府治下の新中國はこゝにはじめて完全なる獨立性を獲得すべくその政治的實力を強化し得ることとなり、またわが國は新中國の成長と共にその力強い共同の上に、大東亞戰爭の完遂、大東亞共榮圈の完成に全力を注ぐこととなつたのである。

所で、この日華新關係の實現によつて、上海はどう影響されたであらうか。主題にかへらう。

封鎖を解かれた上海

日支新關係の實現が上海に齎した數多くの影響の中、最も重要なものといへば、先づ物資移動制限の撤廢及物資集配機構の改變であつた。

すなはち國府は三月十一日第八次最高國防會議を召集し、戰時物資統制に必要な機構確立及びこれが統制實施方について討議の結果、「全國商業統制會暫行條例案」並に實施辦法に関する「戰時物資取締暫行條例案」を決議し、何れも即日公布、十六日から實施を見るにいたつた。同時に日本側として現地日本軍當局並に大使館當局ではこれに全面的協力をなす建前から、昭和十六年九月十六日公布實施の「揚子江下流軍占據地域物資移動取締暫行規定及び同規第四條による物資取締に関する規定、上海地區内重要物資移動制限に関する規定」その他これに類似の諸規定の撤廢を聲明した、そして國府の統制機關の確立までの暫定的措置として國府と協議の結果「揚子江下流物資移動取締規定」を公布し十六日より實施、國府側機構の活動を

見るまでこれによつて物資移動取締が行はれることゝなつた。

何故國府は急に物資集配機構を改編せねばならなかつたかといふならば、參戰下國力の培養と財政強化の觀點から、第一に儲備券價値の擴充強化を焦眉の急とするにいたり、儲備券裏付物資の増強、奥地物資買付けの儲備券使用、一般取引の儲備券建等の施策が必要となり、これを契機として昨年幣制統一の際から問題となつて來た集配機構の改編を斷行することゝなつたのである。これによつて目指す所は儲備券勢力の強化と共に、日支經濟提携の主旨の徹底、更に又奥地物資收荷の増大、配給の円滑化等現實的經濟問題の解決をも含めて、國府が全面的責任と指導を負ふ自主的な統制機構の樹立といふ點にあつたのである。

右物資集荷配給機構の改編並に移動制限撤廢に伴ふ新政策の内容は大要次の如くである。

(イ) 集荷配給機構の改編

- 一、中支集荷配給機構の中央統制機關として全國商業統制會（華商）を設置する
- 二、國民政府は全國商業統制會に對し指導監督をなす
- 三、國民政府の統制統合に對する指導監督上の諮問機關として物資統制審議會を設置する

四、物資統制審議會は中支に於ける物資統制計畫の企畫立案に當る

五、物資統制審議會は國府關係部長、次長、經濟顧問、日側公使、大使館經濟部長、陸海軍代表等を以て構成する

六、物資統制審議會の下部機關として物資統制幹事會を置く

七、全國商業統制總會は中國民間財界人を以て構成する理事會を設け、理事會は中支に於ける主要物資集荷配給に關する重要事項を決定する

八、全國商業統制總會に事務局を設け統制の實務に當らしめる

九、事務局には物資別に部を設け夫々の物資に關する統制實務に當らしめる

十、全國商業統制總會の下に物資別の商業聯合會を設置する

十一、商業聯合會は原則として日華双方代表者を以て構成するが物資の性質によつては中國側のみを以て構成することを得

十二、日本商業組合中國商業公會は聯合會の下部組織としてその統制に服す

十三、日本商業組合、中國商業公會の統制下に組合委員として日本人商社、中國人商社が

置かれ、これら商社は直接生産者と折衝物資蒐買に當るが上部機關より蒐買の成績に應じた見返り物資の配給を受ける

十四、物資統制審議會、全國商業統制總會は上海に設置す

十五、全國商業統制會は地方分會を設け上海との連絡を圖る

十六、地方分會及びその下部組織は上海地區組織に準ず

(ロ) 物資移動制限の改廢

一、昭和十六年九月より施行された揚子江下流物資移動取締規定を改正、和平地區内の物資移動に關しては爆藥、阿片其他少數種類を除く外物資移動制限を緩和若しくは撤廢する

二、上海地區物資般出入制限も同様に制限を緩和若しくは撤廢する

これを要するに、新しい經濟政策の眼目は、一つは中國側の自主的統制組織をつくることであり、一つは従來日本側によつて戰術的に抑へられてゐた中支の物資流通を解放し、特に上海と他地區との交流を自由にすることとして理解されてよいであらう。

かくて上海の封鎖は解かれたのである。大東亞戰前にあつては前記移動禁止があつたといふものゝ、上海と奥地との交流は殆ど自由であつた、何故ならば日本側の規定力の及ばない租界といふ特殊地帯があつたからである。それが大東亞戰爭の勃發と同時にびたりと閉塞された、上海は完全に封鎖されたのであつた。海への道も塞がれ、奥地への道も閉ざされて、上海は經濟的に一個の孤島と化してしまつたのである。この封鎖は暫定的な措置として眞に止むを得ないものではあつた。上海に蓄へられた老大なストックを、多少なりとも奥地へ流すことは、それだけ重慶側の抗戦力を強めることであつたからだ。しかし上海の生産經濟にとつて、それが甚だ不健全な状態であることは疑もない。ストックは奥地へ流れない代りに、一切の工業原料も入つて來ない、食糧も來ない。これでは上海經濟の復興といふことはあり得ず、チリ貧的梗塞があるばかりである。物資移動制限撤廢の英斷的政策は、この孤島上海に起死回生の道を開くべく、經濟封鎖を解いたものである。勿論そこには一面多くの弊害が豫想されはする、しかしこの弊害を最少限度に食ひとめるために、新しい中國側の統制機構が活動せねばならないのである。

さて、封鎖を解かれた上海の経済はどんな変化を示したであらうか。何よりも目立つたのは物價の暴騰であつた。特に綿糸布をはじめとする日用物資は驚くべき奔騰を見せた、少し大げさにいふならば、一夜にして十割の騰貴を見せたのである。もとよりこれは上海の經濟更生にとつて好ましいことではないが一應の物價騰貴は避け難かつた。奥地へ向けて流れよう流れようとする物資を抑へつけて來た堰を切はしたのであるから、猛烈な勢で物資が流れるのは止むを得ないといはねばならぬ。しかし、その代りには、入替つて奥地の農産品はまた烈しい勢で流れ込んで來た。主として食糧である、それまで上海の裏街道を横行してゐた米の闇相場、内地では想像も出來ない大闇相場は、この時を境にして消滅した、野菜、雜穀も亦急速に下落した。かくして上海と周邊地區及奥地との經濟的交流が始つたのである。市民を驚かした物價の狂騰も、實は來るべき安定への前ぶれに過ぎなかつた。農産品の豊富な流入、その價格の下落は何よりも中流以下市民大衆の臺所を安堵させるものであり、昂騰したものと下落したものと平均をとれば、この變動は必ずしも悲觀すべきことではなかつたのである。否むしろ新しい健全な上海經濟の建設のために、これは一度は通らねばならぬ關門だつたといへるのである。

但しこゝで見落してならないのは、假令物資交流の開始によつて物價の騰貴が必然だつたとはいふものゝ、それがあまりに狂暴にすぎたといふことである。そこにはなほ清算し切れない舊い自由主義的商業主義の殘滓が見られるのである。といふのは、物價昂騰の先行を見越した一部營利主義的企業者乃至金融資本家によつて、少なからぬ買占め行爲がなされ、故意に物價を吊上げるといふ不埒な策動が行はれたのである。上海流にいへば囤積である。この囤積行爲によつて物價騰貴が拍車され、前記の狂騰を演出したのであつた。そこに上海經濟再建のために是非共克服すべき障害の一つが横つてゐる。

しかし囤積策動も長續きはしなかつた。國府の緊急取締令が發動され、續いて検査、摘發、處罰が斷行された。國府の政治力によつてこれは一つの試金石であつた。それは一般に要望された程の徹底性はなかつたが、それでも大きな効果を上げることが出來た。囤積は逼息し、物價は次第に安定した。そしてまた、新たに設定された統制も、この事件を契機として本格的な活動を開始した。全國商業統制總會の任務の容易ならぬものであることが如實に示されたのである。

かくて孤島上海が全支の上海として新たに出立するための最初の關門は通過した。そして上海の工業生産を復活せしめるための奥地に對する物資蒐買は着々と進展した。食糧について、棉花が蒐められねばならなかつた。何となれば上海工業の中樞は紡績にあつたからである。その他あらゆる必要な原料の手當が急がれた。實に、わが對支新政策とこれに基礎を置いて樹てられた中支新經濟政策とは、起上る上海に對して力強い生氣を吹込んだものといへよう。

街に見る新上海の相貌

以上、われわれは上海の歴史を顧み、米英東亞進出の跡を辿り、大東亞戰爭の齎したその變貌について語り、新たなる出發の道に就いた上海の力強い起上りの姿について述べた。所で、われわれはこの小冊のむすびとして、起上る上海の現實の姿をその街頭の風光の中に眺めてみたいと思ふ。

先づバンドである。

東洋の紐育などといはれた上海の近代的景觀の中、何といつてもバンドの壯觀は第一のものである。黃浦江にそふ一文字の大舗道に面して、いらかを並べてきそひ立つた大厦高樓の醸出す都市美は、おそらく東京の建築物の背の低い平面的な構成を見馴れた眼には一つの驚異を與へずにはおかない。しかし、この押並んだ大建築のいづれもが、横濱正金銀行其他一二のものを除いて、すべて米英系の商社であり、銀行であり、ビルディングであつたことを思へば、今更ながら彼等の植民地工作の規模の大きさ、その根強さを感じずにはゐられない。

バンドの中間にキャセイ・ホテルがある。上海一の高級ホテルである。その壯大豪華は到底内地の人々の想像も及ばぬ程だ。こゝには一泊千弗のスペツシャル・ルームさへある。金銀丹膏のまばゆいばかりなその室には、戦前金の使ひ途に困つた米國の富豪や、閑暇のやり場に困つた英國の貴族などが、フンゾリ返つてゐたものだつた。それが租界進駐と同時に他のすべての敵産建築物と同様にわが軍の手に押へられた。今は日本人の管理である。しかし弱つたことには、あまり大きすぎ、立派すぎて日本人管理者の手に餘つてゐる。どうやつても赤字なのだ。一體元の所有者であるサツスン財閥は、どうやつてこれを経営してゐたのかと調べてみると

やはり赤字を續けてゐたといふ。たゞ彼等には五十年先のそろばんがあつた。やがてこれらゝ地價が昂るだらう。建物の價格は何倍になるだらう、五十年後には今日の赤字を取戻して、その上いくら儲かるといふ計算があつたのだ。敵ながらあつばれた商賣度胸である。願はくは日本人管理者たるものキャセイの二つや三つに驚くことなくじつくり腰を落着けて貰ひたいものである。

キャセイから少しガーデン・ブリツヂに寄つて、中國風の頂上を持つた摩天樓がある。完成間近に工事中止となつた中國銀行である。中國銀行は一たん敵産として押へられ、清算となるかに思はれたが、後改組復業を許されたのであつた。しかし工事は依然中止のままだ。雄大な大陸政策の立場から、この摩天樓も、中國銀行の古い信用も、大いに活かして働かせるだけの餘裕を持たねばなるまい。いや中國銀行ばかりではない、バンドに並ぶ建物、企業殆ど全部が今は敵産としてわが手中にあるのだ。この大きな獲物の悉くをわが藥籠中のものとして使ひこなすだけの氣宇がなくてはならないのだ。平和の女神の巨像のあたりに立つて、蜿蜒たるバンドの景観に對する時程、今日の上海の歴史的轉換の大きさを感ずることはない。

ガーデン・ブリツヂに近く英國領事館がある、王冠印をつけた古風な門は、今や固く閉ぢられて利益代表國たる瑞西領事の「出入すべからず」の掲示がかけてある。こゝにも時勢の慌しい流れがある。あの傲岸なジョンブルの支配は既に上海から去つたのである。

振返つてわれわれは黄浦江を見よう、こゝにも歴史の流れがある。戦前の殷盛は夢かとはかり、岸邊近くびつしりと詰めかけてゐたジャンク共は何處へ消えたか影もまばらだ。中流の航路をあれ程に船べりを摩して往來してゐた外國船舶も今は見えす、鷗の群が靜かに鳴交はしてゐる。たゞ、一隻だけ特別に巨大な商船の浮んでゐるのは、盟邦伊太利の豪華船コンテ・パアドだ。これはもう永いことゝにゐる。戦雲の印度洋、地中海を越えて祖國へ歸することも冒險に過ぎるし、この巨體では手輕に動き廻ることも出来ない。いづれ同盟國日本のために戦時輸送の手助けをしてくれることになるのだらうが、今は折角協議中と傳へられる。

兩岸五十有餘の碼頭の中活動してゐるのは幾つでもない。碼頭倉庫も同様だ。しかし、すべてこれらは不要に歸したのではない。新しい活動への待機の姿勢なのだ。米英勢力との交通を絶たれた上海港は、昔の汚れた雑踏の後を清掃して、今新しい使命に立たうとしてゐるのだ。

やがて大東亞共榮圈各地とのさかんな交通が始まるであらう、それはかつての米英商業主義の齎した僞滿的繁榮ではなくして、眞實に新中國の經濟的關門としての充實した自らの繁榮である。その日のために上海港はいま準備を整へてゐるのだ。黃浦江の靜かな淀みを眺めるとき、誰もが東亞共榮の將來を思つて、涯しない希望に胸躍らせずにゐられないであらう。

それにつけても、百年勢威を振つた米英の上海退場は何といふ喜劇的な出來事であつたらう。彼等はこのバンドから逃げて行つたのだ。中にも、開戦に先つこと十日、米國マリン最後の引揚げは今も上海人の語り草になつてゐる。一たい彼等程野放圖に上海で遊んだ連中はあまい。彼等の俸給は米國軍人として特別に多かつたわけではないのだが、何がさて彼等の一弗は支那金の四五十弗に當るのだから、彼等が上海で金の不自由をしなかつたことはたしかだ。またさうでもなければあのゴロツキ共が上海くんだりで銃を擔ぐ筈はない。酒と女と賭博、それが彼等の日常だつた。情婦の一人や二人持たない奴はなかつた。で、十一月二十七日彼等がバンド引揚げの日、無慮一千名の女共が目を泣き腫らしてこゝに集つたのである。抱擁とキスと金切聲で、さすが物に動ぜぬバンドの苦力達まで啞然としたといふ。そして彼等は比島へ逃

げ、やがてまた比島を逐はれたのであつた。

靜かなバンド。暴戾英米の策動と壓迫を排除し盡した靜かなバンド。これこそ自らの力もて自らの繁榮を築くべく起ち上る上海の一つの象徴ではないだらうか。

次いでわれわれは南京路へ行かう。こゝは商業都市としての上海の中心地である。そしてまた消費の中心地でもある。大デパートが立並び、戲院、シネマが集中してゐる。端から端まで華かな商店が華麗を競ひ、その繁盛は到底銀座の比ではない。所で打見た所こゝには格別變つたこともなささうだ。押流れ押かへす人波、昔ながらの雜踏である。しかし少し注意して見れば、やはりこゝにも新しい上海の姿が見える。第一日本人の多くなつたことである、戦前上海名物テロの策源地だつた共租のこれは眞中である。その南京路にこれ程多くの日本人が來てゐるといふことは、明らかに治安の完全な恢復を物語るものだ。反對に、敵性國人は極度に少く、しかも腕にA(アメリカ)B(イギリス)X(その他)のマークのついた赤腕章をつけ、心細げに歩いてゐる。グリル・トリコロールは何時も満員だが、客の九割は支那人と日本人である。兩國人は同じデスクを圍み談笑しながら食事をしてゐる。歴史の新しい日が、おのづか

ら生み出す親善風景である。そしてこの敵産グリルを管理してゐるのはやはり日本人だ。コックも給仕もすべて若い支那人だが、その潑刺として機敏なこと、これ亦到底内地の食堂の比ではない。

すべての商店では、商品の價格表示が勵行されてゐる。そしてすべての價格は既に新法幣たる儲備券建である。幣制の統一は、少くとも上海では完全に實現したのである。

某々大戲院の看板には、堂々とかつての抗日映畫のスター達の名が並んでゐる。胡蝶、陳雲裳、李麗華、陳燕々等々である。ほんの昨日まで抗日陣營にゐた筈の彼等の映畫が何故新しい上海の南京路で上映されてゐるのか、外でもない、彼等も亦大東亞戰爭の勃發と同時に更生したので。十二月十七日香港の陥落は彼等の本據を覆滅したし、彼等の迷夢を追拂つたのである。彼等は重慶へ行かずに和平陣營に來た。そして上海映畫界は頓に活氣を呈したのであつた。

ダンス・ホールの敵性も拂拭された。戦前、南京路界限の大小ホールはすべて徹夜營業であつた。國際的伊達男達は夜の十一時頃までカフェーやホテルに待機し、それから自動車を馳つてホールに詰めかけ、明方になつて引揚げたのである、無論敵性音樂が幅を利かしてゐた、公

然と米英軍歌が吹奏されもした。それが今ではすっかり自肅して營業時間は十一時までとなり露骨な敵性音樂は排除された。スイロスははじめ一流ホールの繁榮に變りはないが、昔の自墮落は既がない。われわれはいつでもそれらのホールで日本の音樂を聞くことが出来る。荒城の月にはしまつて支那の夜にいたるまで、あらゆる日本製音樂の進出してゐることも面白い。今は消費の中心地である南京路あたりにさへ、新しい息吹きは通ひはじめたのだ。

更にわれわれは霞飛路アヴェニュー・ジョワフルを歩いて見よう。こゝは佛蘭西租界のメン・ストリートである。美しい鈴かけの並木、赤と青の煉瓦建の商店や住宅、巴里に似通ふといふこの街のたゞすまひに、われわれはあらためて上海の國際性を感じるのである。しかしこゝにも東亞復興の歴史の波は寄せて來た。わが國の專管租界返還の英斷が發表されて間もなく、ヴィシー・フランスは「上海に於ける特權の放棄」を聲明したのであつた。これはまだ聲明だけで實行されてはゐないが、國民政府側の準備さへ整ふならば、いつでも實現する筈のものである。佛蘭西租界は間もなく消えてなくなるのだ。おそらくジョワフル元師の名を記念したこの街路の名は残るであらうが、佛蘭西の行政權はなくなるのだ。そして上海はいよいよ東亞の上海として自主的

體制に建直るのだ。

心なしかこゝで見ると中国人の顔色は特に明るい。彼等はいま上海を取戻しつつあるのだ。新公園の心憎いまでに掃き清められた遊歩道には、佛蘭西の少女と共々に小孩達が群れ遊び、ベンチにかけた若者は身じろぎもせず孫文論集を讀んでゐる。

それにしてもまた何といふたくさんな米賣達であらう。主として若い百姓娘だが、てんでに米袋を肩にふり分けて、所かまはず聲を張上げてゐる。察するに彼等は近郷の農村から馴れない商賣に出て來たのであらう。敏感といふべきでもあらうか、物資移動制限の解除と同時に、水の低きにつく如く、食糧不足の市中へ向つて米賣達は押かけて來たのである。彼等は肩にのる程度の米を賣つたなにかの金で、彼等の低い生活に必要な物資を求めて歸るのであらう。やはり上海の封鎖を解いたといふことはいふことであつた。農村と都市とは交流しなければ互に立たない、上海はそのすべてのストックを吐き出して宜しい、その代り都市的工業的生産のための資材を農村から取入れるのだ。

最後にわれわれは蘇州河を渡つて北四路路に來る。いふまでもなく、こゝは上海の日本人街

だ。すべてに於て、更生上海市民の模範たるべき日本人は、さすがに時局の緊迫を反映させていづれも引緊つた面持である。上海の日本人は内地の日本人に比べて時局認識がうすい、或は消費生活が放漫だ等の評言は折々耳にするが、これは一部特殊な人々を見て漫りに居留民全般を推すものである。早い話が北四路通りで東京の銀座や新宿に見られるやうなはでな女達を發見しようとしても先づ不可能である。藝妓の商賣姿ならば格別、一般居留民の婦人達は少々ちみすぎるくらい、質實なみなりでしつかり持場を守つてゐる。男達にしてもさうだ。國民服姿は内地の都會よりもはるかに多い。そして日曜祭日殊に大詔奉戴日には、女ならばもんべ姿の、男ならばシャツ一枚の勤勞奉仕隊や鍊成隊が隊伍を組んで繰出すのを見るだらう。尤もそれらの裝備が内地に比較して少しばかりいゝのは土地柄である。上海はまだスフといふ怪物がない。で女のもんべも男の團服も純綿で立派である。

防空訓練も虹口ハンキウのそれはまさに實戦さながら凄絶を極める。それもその筈、こゝは敵前に近いのだ。重慶側各地には今米空軍が必死に反攻の機を狙つてゐる。上海が新東亞の中樞として更生すればする程、空襲の危険は迫るのだ。現地の日本人にはその覺悟がある、火の出るやう

な猛訓練、これだけ見ても上海居留民の心構へはわかる筈だ。

北四川路は今や悉く貌を改めた。ネオンの自衛、ダンスホールの閉鎖は内地と同様である。かつて旅行者の獵奇心をそよつた支那的魔窟はすべて姿を消した。路次の入口にかけられた「賣笑婦の家屋」に出入すべからず、「憲兵隊」の掲示も既に古びてゐる。

辻々に立つ印度人巡查の顔も晴れやかだ。彼等はまるで生れながらに巡查が天職でもあるかのやうに、雨の日も風の日も黙々として立つてゐるのだが、戦前、米英によつて牛耳られてゐた租界工部局は、彼等に巡查部長以上への道を與へなかつた。極度の民族的差別待遇である。然るに今や彼等に昇進の道もひらけた。同じ有色民族たる日本人によつて工部局が再編された日から、彼等はならうと思へば警視にでもなれることになつたのである。新しい工部局が勤績者の表彰を以て彼等の勞に報いたことも、今日までの希望のない生活に對して一つの明るさを齎したに相違ない。

そしてすべての中國人も亦こゝでは特に親しげに見える。日本人街とはいふものゝ割合からすれば日本人の数はさう多くはない。十人に一人位でもあらうか。しかし虹口では中國人も何

等かの形で日本人と直接的接觸を持たねばならないのだ。で、多くの中國人が片語でも日本語を話す。わけへだてなく日本人につきあふ。海濱路あたりの日本映畫館には、映畫が現代劇であれば特に、中國人の觀衆が群がるのである。

さて、北四川路の最北端には、日本人なら誰でも映畫や寫眞でなじみの深い、あの上海特別陸戦隊の本部がある。こゝばかりは戦前も今も何の變りもない嚴然たる偉容である。しかしわれわれは、更生過程の上海街頭を眺めわたして、あらためてこの偉容に接するとき、無量の感慨にうたれないわけにはいかない。上海特別陸戦隊。これこそ米英の魔手に躍る舊國民政府の挑戦に、上海事變の不祥事が惹起されて以來、あらゆる困難にうちかつて海を守りつゞけて來た聖なる力なのだ。そして今も立ち上る上海の最尖端に立つて、そのより正しき前進を見守りつゞけてゐるのだ。人々はその樓上に翻る旭日旗を仰ぐ、そして上海更生の犠牲となつたふれた幾多將兵の英靈に合掌する。そしてまた、新しき上海の速かなる建設のために戦ひ抜かむことを誓ふのである。



(出版會承認 號)

昭和十八年十月五日印刷
昭和十八年十月十日發行
出版會承認
一二七〇三二〇
三〇〇〇部

「上海は起ち上る」

定價 ● 一圓
特別行爲税 金五錢
實價(税込) 一圓五錢

著者 東 英 男

發行者 山 田 正 夫

印刷者 株式會社 文 成 社

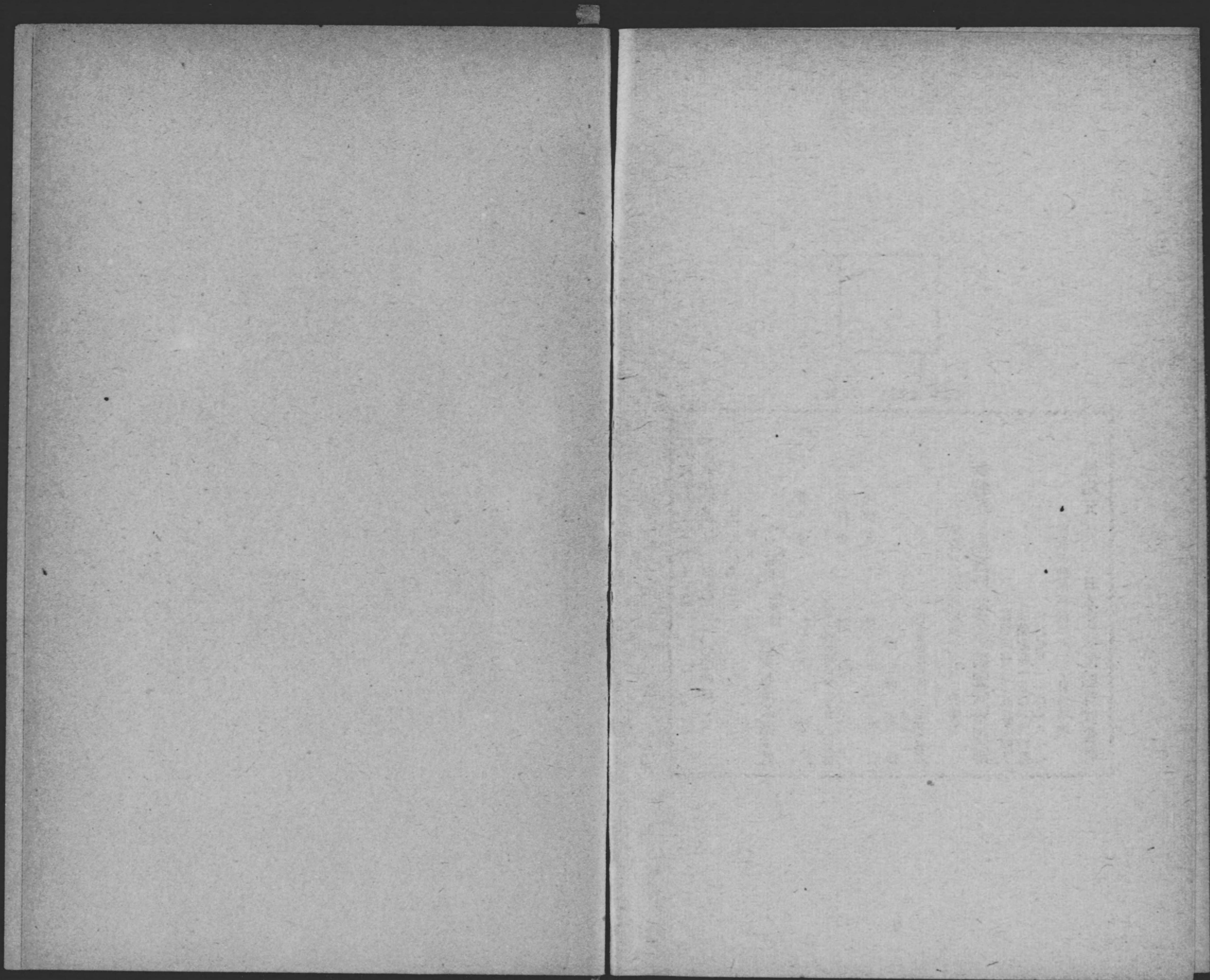
東京市四谷區新宿一丁目二四番地
東京市神田區錦町二丁目五番地

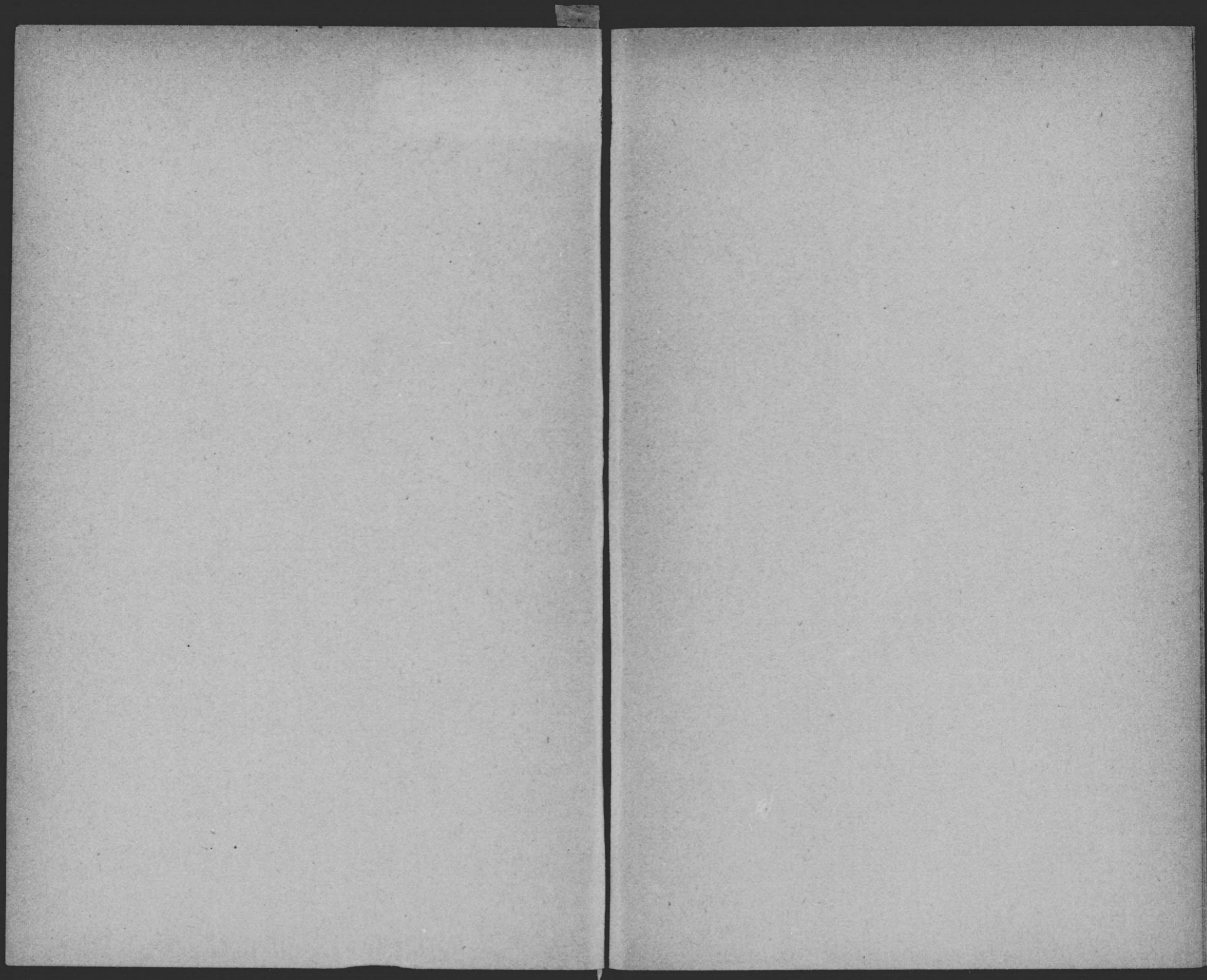
發行所 國民政治經濟研究所出版部

電話四谷(35)五八〇四番
總發東京一五〇一六四番
出版會員一〇一八七番

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社





CL.

NO. 61188



賣價(税込)金壹圓五錢